



219号

今月の発信

あこら自立の心理学

再び 「お上」を考える

H・V、水俣、住専、沖縄……山ほどの危機を感じながら
なぜ抵抗できないのか。自らの呪縛から問い直そう。

〈あこら自立の心理学〉学習会そのIII

沖縄◆三万四千人の署名運動

阪神◆被災者に公的補償を！

各分野の第一線で活動する女性たち16、200人!

現代日本女性人名録

定価28,000円

◆ビジネス、政治、法律、社会福祉、教育、

科学技術、芸術、文学、スポーツ、マス

コミなど幅広い人物選定。

◆詳細なプロフィールと連絡先を掲載。取

材、執筆・講演依頼などにすぐに役立つ。

◆特定分野の人物が一覧できる専門分野別

構成十人名索引。

女性解放、出産・育児から女子学生の就職難まで、戦後50年間の図書26、300点

女性・婦人問題の本全情報45/94

定価28,000円

日本史を彩る女性822人の伝記・評伝3、300冊を紹介したブックガイド

読書案内・伝記編 日本の女性

定価5,000円

「子どもの権利条約」を親の視点から捉え直す。「母親になる勇気がわいた」と大好評!

子どもの権利・親の権利

―「子どもの権利条約」をよむ

小沢敦子著 定価1,380円

〒143 東京都大田区大森北 1-23-8
TEL (03)3763-5241 FAX (03)3764-0845
インターネットのホームページ <http://www.nichigai.co.jp/>

日外アソシエーツ

季刊 理論戦線

1996年夏(48)号 1200円

●基地撤去闘争と女性たち

「一人の少女の人権も守れなくて、何が安全保障ですか」桑江テル子、源啓美、仲宗根京子ら、安保をゆるがす女性たちからの熱い訴え。ドイツ最新報告「ボスニア戦争とナチズム」

他に七〇年安保の激動をつくりだしたキーパーソンが語る「第2次ブント三〇年」、自治体リストラの現場から、木前利秋・ハーバーマスとコミュニケーション、荒岱介・反体制運動の可能性など。読者とともに新しいカルチャーをめざす元氣の出る雑誌です。

左翼思想のパラダイム・チェンジ

荒 岱介著 2000円

廣松哲学に学びユーモラスに説く左翼思想の脱構築。話題沸騰の「ブントはタバコをやめました」「民衆を導く自由の女神だぞ」他。

『あーら』読者の方には送料当社負担でお送りします。

実践社

〒335 埼玉県蕨市塚越 2-18-6

TEL 048-431-1804 F 445-8943

「お上」に挑むわたしたちのやり方

しま・ようこ

北京世界女性会議に参加したわたしたちが背負い込んだのは、かつての戦争をめぐる「加害と被害」を未来に向けてどのように引き受けて生きるかという、とてつもなく大きな宿題だった。これを北京会議に行かなかった方々と分け合い、共に解くための話し合い学習を重ねるうちに、「お上という存在」が浮き彫りにされた。今、その正体が少しずつ見えはじめている。

お上は巧妙な衣装をまとっていて、仲間と見分けにくい。そればかりか、わたしたちが効率を求めて焦ったり、事を荒立てないで順応しようになるとき、内なる身のこなし方がお上に似てくることがある。わたしたちの内と外のお上がメビウスの帯のように結びつくと、国民が主人公であるはずの社会をじわじわと崩す暴力の装置を作りあげてしまう。お上はPTAにも、社会教育の場にも、市民運動にさえもカオスを出す。

ここ二回にわたる学習会で、お上を許してしまいがちな身近な状況をめぐって、さまざまな手立てを語り合った。一人の発言に触発され、その波紋が内なるお上を照らし出す。例えば、「えっ？ 何かおかしい」という気持ちをやり過ぎず、その場で相手にどう返せるかを考えるうちに、宿題の解き方が豊かになっていく。

わたしたち〈自立の心理学〉の話し合い学習は、討論方式の学習とは一味違っているようだ。問題の根を探り、見据えて取り組む力は、自分の実感と感性を軸にしながら、参加者の相互トレーニングによって育っていく。この試みはまだ始まったばかりだけれど、男性中心社会が踏みこむ弱者の声を「広場」に伝えるワンステップを担えそうに思える。お上からの自立はへあごらのライフワークでもあり、読者の方々の紙上参加をいただきながら、宿題を解きつづける確かな羅針盤にしていきたい。

二一九号 目次

「お上」に挑む私たちのやり方

しま・ようこ 1

AGORAZZEIN 再び「お上」を考える

芦澤 礼子／斉藤 千代／しま ようこ／竹崎 周子 4
田中 喬子／田村 伴子／二方 とし子／綿津 靖子

TOPICS

中村幸子さんの議員復職を勝ち取りました！ ほか

38

集会から

変えよう均等法！ リレートーク／民法改正リレートーク

ほか

47

沖縄から

三万四千人の署名運動 ほか

51

阪神から 被災者に公的補償を！——いま、現地では——ほか	64
めじやーなりすとのめ 「声高」な人たち	松田 智子 70
気になる英語 カタストロフィー・ポイント	奥川 睦 72
あごら試写室 GAMAー月桃の花（大澤 豊監督）	74
あごら読書室 少女たちの勤労働員の記録ほか	76
女ひとりドケチ旅11 プラハからポーランドへ	辻 みゆき 79
あごらのあごら	88

再び「お上」を考える

〈あごら自立の心理学〉

芦澤礼子／斎藤千代／しまようこ／竹崎周子
田中喬子／田村伴子／二方とし子／綿津靖子

〈あごら自立の心理学〉では、「お上」の問題について学習会を積み重ねてきました。身近な自治体や市民運動にも「お上」は存在する。それに対抗する手段は——。各メンバーが自分の内面から率直に語り、話し合いを重ねるうちに見えてきた「お上」。2月27日(火)と4月19日(金)の学習会から、まとめてご報告します。

「お上」ってなあに II

多数派に支持されるから「お上」か。

竹崎 私の考えでは体制というか、力があるものが「お上」だと思っています。情報と権力を握っているのが「お上」、それは政治だけではなく、会社では平社員にとっては課長も「お上」。お上というのは常に上で、権力を持って自分を支配しているもの、自分に影響を及ぼしているものが「お上」じゃないでしょうか。私はある種の社会慣習で強制力を持つもの、主婦はこうすべき、母親はこうすべきだとか、そういうある種の強制力、じわーっと締めつける社会の力も、ある意味で「お上」に入るんじゃないかと思ったんです。

二方 今、竹崎さんがおっしゃったように、自分を支配するものが「お上」となると、ブランドものに本当に価値があるのかないのか、自分でもわからないのにもかかわらず、ブランドそのものに価値があると思わせるような、そういうことにも繋がりますか？

竹崎 直接繋がるかどうかわからないけれども、社会の慣習として、現在ある価値観でこうあるべきだと、自分に圧迫感を感じさせる力、こうあらねばならないと、縛る力かな？

斎藤 ブランドは一種の信仰の場合もある。本当にいいブランドものもあるけど、そうでないものも多い。なぜブランド信仰を持つかを考えたら、お上信仰とどこかで繋がって見えるかもしれないね。

竹崎 多数派に自分が属していると、安心感がある。少数派の方にいると心細い。少数派を選んだことに対する絶対的自信がないと、やっぱり不安じゃないですか。

しま 多数の方にいると安心だって言われるけど、本当に安心だろうか。なぜ少数になると不安になるのかな？

竹崎 そこが問題なんだけど……。お上って、多数派に支持されるから、「お上」になりうるわけでしょ。

しま お上の実体はマイノリティなんだけどね。

竹崎 大勢の選挙民に投票されてお上になるわけでしょう。

しま 投票された自分の側は、少数の指導者、つまり、マイノリティだっていう意識がない。

斎藤 以前に南アフリカに行ったとき思ったんですけど、白

人はほんの一握りで、絶対多数としてはネイティブの人の方が多いのに、白人の権力を倒せない。多数派の人たちがまるで生気がなくて、人形が歩いているみたいな感じだったんです。最近のニュースでは表情が全然違いますけど、当時は死人の町みたいだった。あれだけの人数がいてもパワーにならない。南アフリカだけじゃないけど、例えば、あれだけの広さの中国に日本人が侵攻した時も、少数者だったじゃないですか。多数派はいろんな方法で闘えたと思うんですよ。

しま 侵略していった自分たちが少数派だなんて、全く思いもしない意識の傲慢さ。

斎藤 マヤ文化を倒したスペイン人は、百人とか二百人とかで何万人もの原住民を支配した。そのあたりから「お上」の系譜が見えてくるんじゃないですか。昔からそういう話はたくさんある。でも結局、奴隷は立ち上がって闘っても、スパルタクスの反乱で終わる。「猿の惑星」の映画もありましたね。

しま 自分がそのとき奴隷だったとしたら、どうして立ち上がれなかったんだろう。「お上」にどうしてやられちゃったのか……。恐怖感？ そのへんも細かく考えてみたい。

「お上」が怖い、その実体は？

斎藤 あとで考えてみると、怖さっていうのはほとんど幻影にすぎない。

しま 幻影が吹き込まれる以前に、少数の人がやってきても、やっぱり怖いだろうか？

竹崎 少数でも、力があれば支配できる。今のアメリカの中のユダヤ人は人口比は極めて小さいけれど、経済も金融も押さえて大きな発言権を持っている。ヒスパニックの人たちの人口比は大きくなっているけど、多くは貧しくて力がないし、やっぱり多数派が少数派に支配されている形ですよ。

斎藤 アメリカの建国史を読むと、最初の頃はアフリカから奴隷として連れてこられた黒人が州によつては六〇パーセントも占めているんですね。自分たちが殺されるんじゃないかっていう恐怖を白人が持っていた時期もあったんですよ。武力の面では段違いだったわけだけれど、絶対数っていうのはやっぱり大きいでしょう。本来なら。

しま 本来ならば、ね。

竹崎 でも日本では、人種も宗教も同じとは言わないけれど似通ったところがあって、そういう形では見えてこない。

しま 今、個人にパワーがないっていう思い込み、吹き込まれた感覚が強いと思う。七〇年代以降かな？

斎藤 民主主義を逆用されている。本当は、議員さんは私たちの頼み事を実現する人のはずですよ。それがどこで逆転したのか――。確かに地位の力っていうのはありますね。たとえば、中国に行っても、私なんかと議員さんが一緒に歩いていると、もう格段に待遇が違いますものね。結局、今のままだったら、私たちがどんなに嘆こうが抗議しようが、「お上」の権力は安泰。

二方 議員さんたちの話なんですけど、彼らはものごとを決定していく力を立法院の中に持っているわけですよ。その力を使つてもらうために国民に選ばれたはずなんですけど、実際はそこで国民一人ひとりが決定権を持っているわけではなくて、彼らがどのようにでも決めていける、そういう状況が「自分に力がある」と思わせることになっている。

斎藤 国民投票制が定着して普遍的になると、違ってくるかもしれない。現在は私たちがダイレクトに意志を表明して、

それが最終的な決定になる機会が何もないわけでしょ。だから例えば、青島さんをいったん選んじやったら、彼がどんなことをやろうと、あれよあれよという間に、流れが変わってしまう。

しま そこがシステムとしての根本の問題ですね。だけど、都民一人ひとりが青島さんがおかしな方向に動いたら、自分が都庁へ出向いて抗議するやり方がある。私たち個人が、理不尽な権力が自動的に発揮されてしまうシステムを変える決定権を持っているのに、それを行使できない。彼らに委託したけれど、決定権は自分にあるっていう意識を行動にできるかどうかが分かれ目になる。

斎藤 それはとても大事なことです。公約や期待と違う行動をしたときは断固抗議する、ということが日常的になれば、暴走を阻止できる。現在はデモの規制がブレーキになっているうえに、労働組合が、もう御用組合になってしまっていて、政府に決して抗議しない流れになっているけど、デモや組合以外の個人の力を発揮する方法を考えるチャンスでもある。

本当に今一番効くのは、サラリーマンの税金を給料から天引きして会社が収めるシステムをやめて、全部個人申告にする

ことだと思っんです。政府がなぜあんなに気前よく、住専にさえお金を出そうとするかっていうと、苦勞して集めたお金じゃないからでしょ。国民の意志に反することをしたら、皆お金を出さない。皆が税金を払わないことを示したい。反税闘争が私は一番効くと思う。外国の人は、なぜ日本人が反税闘争をやらないのかって言いますね。

しま タックスペイヤーとしての自分意識の大切さ。

田中 「怖い」という話に戻りますけど、私はすごく怖がりだから、デモに行くのも怖いっていう気持ちがありました。

しま どうして怖いんでしょう。

田中 どうしてかって、ずっと考えてるんですけど、自分の中に刃向かうだけのゆるぎないものがないんだってことに気づいたんです。自分は絶対正しいと主張できない。戦争中の本なんか読むと、女性は相当ひどいことされたでしょう。そういうふうに分の命が脅かされる怖さがありますね。

斎藤 レイプってこと？

田中 そう、そう。

しま レイプが怖いのと、政治への抗議やデモが怖いのが、なぜ結びつくのかな？

田中 テレビを見ても、警官が警棒振りかざして、デモ隊を攻撃的に扱う。

斎藤 今は違うでしょう。安保や成田の頃はあったけど。

しま 報道が怖さを刷り込んだんじゃない？

田中 何年か前から私はデモに行きはじめてたんですよ。怖いけれどもとにかく行ってみようって。実際に体験してみると、怖さってなくなっていくんですね。想像していたよりも、自分がやってみるとそんなに怖くはないというのが一つずつわかっていく。

しま そうすると、一つずつ怖くなくなったときに、確固とした私がいなくて感じていたその部分は、どうですか。少し変わってきた？

田中 ええ、ずいぶん変わってきました。自分がどこへ行ってもできるわけではないけれども、正しいと思ったら少しは言えるようになりました。

「お上」の暴力・殺される怖さと怒り

二方 今のデモの話ですけど、私が大学生のとき学園紛争が

あって、連日いろいろな討論会があったり、派閥に分かれてもめたわけです。その時最終的にロックアウトになって学校側が機動隊を導入したんです。まだ機動隊が東大の安田講堂に入る前でしたから、大騒動になった。朝五時頃に、機動隊が入るといふ連絡があつて、早速学校へ行つたんです。すでに機動隊が中にいて、学生は学校から出ると、非常に威圧的に、軍隊的な調子で蹴散らされた。それはものすごく怖かった。数からいえば学生のほうが多かったかもしれないのに。斎藤 確かに、怖いっていうのはわかりますね。命を奪われる恐怖、物理的にね。そういうことはあるから。

二方 ええ。

しま その怖さは同時に怒りと結びつきませんか？

二方 皆と外に出されてから、怒りましたけどね。どうして自分たちの学校なのに出されなきゃならないんだと。生理的な恐怖でしたね。

斎藤 それは怖いですね。確かに……。樺さんみたいに殺されるわけですから……。でも今は、あんな時代ではなくなりましたね。だけどそれだけ巧妙になっているんじゃないですか？ 『あごら』二一四号に掲載した、郵便振込用紙のコピ

—だけ送ってくるっていう話は、すごく怖いと思うんです。その運動に加わった人を芋づる式に捕まえられるわけでしょう、本名と住所で。見えない暴力ですね。これは、考えてみると大事件ですね。気がついた時にはもうトリモチに足を取られたみたいになっている。この前の戦争の時も、気がついた時はもう身動きできなくなっていた。皆、けっこう抵抗していたのに……。

しま 私、樺さんが亡くなったその現場にいたんです。だからもしかしたら——傲慢な言い方かもしれないけれど——殺されたのは私だったという思いがあるのね。あの時私は怖かったかという、怖さより何より、理不尽な力への怒りでいっぱいだった。怖いなんてもんじゃない、あの怒り——気が狂いそうに怒りました。で、あとになって怖かったんだと思っただけ、その場では怖い感じはなかった。

斎藤 私も樺さんが亡くなったとき、赤ん坊を置いて国会前に行ったんです。そこで村松剛氏に「こんな所へ来て、危い」と言われた。「危い」と言われて、とても驚いた記憶があります。私はあの時、怖いという気持ちは全然なかったです。とにかく自分も国会前に駆けつけられたという満足感があつ

た。それまで赤ん坊が生まれたばかりで、外に出ることもできず、放送や新聞で闘争の様子を見ることしかできなかったから、やっぱりその現場に駆けつけて、一挙手一投足でも自分自身で訴えられたと——。けどどいかに無力かということも痛感しましたね。あれだけ幾重にも群衆が国会を取り囲んでいても、当時の総理、岸は出てこない。自分の信念があるなら出てきてスピーチしろと、本当に思いましたね。いつも私たちは見えない相手に対して空手を振り回すしかない。

市民の「党」はどこへ？

斎藤 京都の市長選は惜しかったですね。市民と共産党とが一体になってやっていたら、勝てたのに——。小選挙区制になる次の選挙が大変だと心配してるんです。

竹崎 京都の市長選では、住専処理への反対をあなたの投票で生かしましょうっていうので、さあ、生かしてやろうと思っただけ、もう片方は五党相乗り、もう一方は共産党、他にも無所属の方が立候補したけど、こちらの選択肢がない。

斎藤 首長選は一人しか選ばれない。一種の小選挙区制です

ね。共産党の嫌いな人たちにとっては、衆議院選が小選挙区制なのは絶対的なチャンスですよ。

竹崎 党派の動きに依存しない中間レベルの人を吸い上げるところがなくなっちゃいましたよね。

斎藤 それを作らなきゃ現実はいくらも変えられない。それでへあごろんでも新年号で、応援団を作ろうと提案したんです。政党を作ろうというと、みんな尻込みしちゃうから、まず応援団つくって、外堀から埋めていくほかないんじゃないかと。

竹崎 小さな市民団体は保守党に吸い込まれてしまって、いつの間にか大きなブラックホールみたいになってしまっている。特に地方自治体の首長選のときなどは。

二方 私の区の区議会議員が市民ネットワークから一人出てくるんですよ。今ちよつともめているのは、区の施設を住民が使うのに、これまで有料と無料の所があったんですけど、新たに有料化と価格の改訂が打ち出された。学校を社会教育の場として無料で貸してくれるシステムもあったのに、それを全部有料にする方向になりそうなんです。反対している人たちと議員さんに陳情に行ったら、話を聞いてくれたのは、何と共産党だけ。市民ネットワークから出た人も、もう社会

党と同じようなことを言ってくれないんですよ。

斎藤 まさに、「お上」のメインストリームに入ったら最新なんですね。メインストリームそのものが「お上」になる。それがどんどん肥大化する。もともと大きいものがますます大きくなって、端っこや周辺にいる者ははじき飛ばされちゃう。

怖さの実体を、きめ細かく捉えながら

竹崎 さっき、身体的な怖さの話が出ましたね。小さな新聞記事でしたけど、原発に反対している人の所にいきなり家宅捜査が入ったというのがありました。引っかきまわされて、大したことなくて引き上げちゃったらしいですけど、でも、情報を握られてある日突然捕まって、警察署に収監されたらちよつとやそつとじゃ出られないし、面会だってなかなかさせてもらえない。いきなり一人、そんなところへ連れ込まれたら、それはもう怖いですよ。

田中 私もそういうの怖い。

竹崎 自分の情報を握られちゃう怖さ。

しま そんな握られ方は本当に嫌だと思う。でもね、私は「怖

い」という言葉をもう少し注意深く使ったほうがいいと思うの。怖さの中身を丁寧に捉えてみたい。それだったら「家宅捜査? どうぞやって下さい。何も無いよ、ご苦労さん!」くらいは言いたい。誰も家宅捜査を怖がらなくなったら、ちょっとした情報でやたらにやらなくなるでしょうし、怖がらないこつちを、向こうは怖くなるかもしれない。

斎藤 二十年くらい前ですが、へあごらには、よく警官が来ました。私一人が土曜出勤してた時にも来ましたが、「どうぞどうぞ」ってお茶を出して、校正紙を読んでもらったんです。そうしたら、来なくなりました。

竹崎 大勢の人が、なかなかそこまでできない――。

しま いや、それは違う。マイノリティの私が進ずる。竹崎さんがどっちの位置にいるかが問われるんじゃない?

竹崎 一人ひとりがそういう覚悟を持たないと――。

しま 大多数ができるかどうかじゃない。マジョリティになっちゃったおしまい。「お上」に結びつきやすい。女性運動がマジョリティになればいいなんて思っていないもの。普段あまり連帯しなくてもいい、たくさん、細かいマイノリティを増やしていつて、それぞれに「やろうね」という安心感、

信頼感があればいい。それを皆がやれるだろうかって考えてしまふのは、気になるんですよ。まだまだ私たち、一般論で話してるんじゃないか、って。

斎藤 今はもう、一般論を話してる余裕はない。どうやって小選挙区制を逆手に取って勝つかという話をしませんか。そうすると「お上」というものの実体が、もつと見えて来るんじゃないですか。本当に日本の憲政史上、恥ずかしい大悪事ですよ、参議院で決めたことを真夜中の密談で覆すなんて。芦澤 それをマスコミがあおった。

斎藤 住専とか、エイズ薬害問題でマスコミはやつとかっこいいことを言い始めたけれど、やっぱりまだ腰が引けている。もし、本当にマスメディアが問題の本質を突いたら勝てると思うんですよ。

しま 今の状態じゃ、マスメディアが突くわけではない。突かざるを得なくなるように、私たちが何をやっていくか。

斎藤 新聞社は朝刊夕刊制をやめて、朝刊あるいは夕刊専門紙にして講読料を二千円くらいにして独自性を発揮したら売れると思う。それで胸のすくような記事が毎日出たら、駅売りでもどんどん買うでしょう。スポーツ紙だって自分がファ

ンの側が勝てば皆買うじゃないですか。あれ式に訴えたらいい。

青島さんが都知事になったとき、私は、ぜひケーブルテレビをつくってほしいって、市民の立場から提案したんです。そういうミニメディアを作って、マスメディアが伝えてないことを伝えてほしい、と。それは受け入れられてメトロポリタンテレビができたようですが。

女たちの手で、ナマ放送の演出を

二方 区でもケーブルテレビはあります。その番組作成者の一人に友達が応募してなったんです。ところが、区の行政を批判するような番組を作ると吸い上げてくれない。作って出しても行政がチェックするから、っていう話を聞きました。斎藤 作ればいいというものではない。作ったところから仕事が始まる。ナマ放送の形でやらないとダメなのね。

二方 ビデオをつくって送っても採り上げられない。うまく行政をホメながら皮肉れる力量がまだ十分じゃないから、チェックされておしまい段階だねって、皆で話したんです。

斎藤 だけど今、これだけ住専のことで人びとの意識は沸騰している。「住専に一万円出すのだったら、世直しのために出そう」っていう運動をしたい。そうしたら資金はけっこう集まると思う。

竹崎 郵政省の認可もなくて電波を出せるんですか？ 認可の大小とを、お上が握ってるんだから。

斎藤 ビデオが普及しているでしょ、だから深夜の電波を使っておもしろい番組作って、どんどん流すとか、いろいろな方法があると思うの。企画を持ち込んでやれる。

二方 企画を持ち込んで買ってもらうんですか？

斎藤 買い手がなかったら、私たちがスポンサーになるんです。夜中の時間帯は安いんですよ。早朝とか昼間の三時から四時頃とか、安い時間帯はある。あるいは「朝まで生テレビ」みたいにやるとか、お決まりのメンバーじゃなくうんと面白い人を出してね。そういう企画から考える手もある。

しま 「朝まで、女たちが、怒っている！」って企画。

斎藤 ターゲットを決めて「今度は、京都は絶対勝たせる」とかね、そして本当に勝たせる（笑）。

しま しっかり演出してる意識でやらないとだめね。もちろ

ん本気でやるんだけど、本気でやっている自分を対象化して見られる位置でやらないと、どんなふうに足を拘われるかわからない。

斎藤 想定問題集を練ってやったら、案外面白いものができ
るんじゃない？

しま その演出を叩かれたときに、本当のパワーが出せる。
それにどう応じるかで。

斎藤 そうそう、この激みを動かす刺激的なことをやらなきゃ、もうだめですよ。敗北意識を吹っ飛ばさないと。「選挙のとき白票を投じよう」なんて、それは敗北意識でしょう。白票運動やるくらいなら、新党つくれますよ。徹底抵抗やったら、各政党もあわてると思うんです。

二方 そうですね。

斎藤 今がチャンス、あの人ならと思える人の名を連ねて、新党を作ったほうがいい。「入れる党がない」という声はちまたにあふれている。みんな棄権しちゃうもの。消去法で共産党に入れる人は増えるでしょうけれど、既成の政党ではない、市民が主体になった政党も必要だと思ふ。そのとき、政治が本当に自分たちのものになる。

今はわたしたちが勝たなきゃダメ。だからどうやって勝てるかをまじめに考えませんか。抽象論でなく、できるかぎり具体的に――。

しま 勝つという意味は、スタートラインに立つということなんですよ。

斎藤 そうです。

しま そこをしつかり捉えないで「勝つ」のはよくない。勝つだけだったらスタートライン以下ですものね。私たちが本気で、スタートラインに立てる人を支持する。

斎藤 菅直人さんがエイズ問題で動けたのは、菅さんの後ろにいた市民運動の人たちの力でしょ。

しま そうだと思ふ。新しい政党作って勝てたら、本当に民意を反映できる政治の始まりになる。

斎藤 この人はと思う人を皆がどんどん推薦して、推薦された人は必ず出るというルールにする。そういうふうにしな
いと、また足の引っ張り合いが始まるでしょう。

しま 選挙運動のやり方も変えないと。車で演説して回るのはだめだと思ふ。

斎藤 あれは時代おくれですね。田中優子さんが、江戸時代

は、例えば、はっぴのデザインなども皆メディアだったって話してらした。着物の紋とか、当時の読み物とか、そういうものを通してメッセージをいっぱい送っていたんですね。今みたいにメディアがあふれていても送り手が固定していて狭い幅になったら、人間の創造力もしぼんでしまうじゃないですか。江戸時代は押さえつけられていたから、裏の手を使っていたというパワーとアイデアが溢れていた。瓦版なんかもそうですよね。

しま 今の若者の音楽のフィーリングに、メディアはすごい影響力を持っている。

斎藤 女子高校生の落書きとか、いろんなものと手を結びながらやればいい。市民運動なんかやっていなかった人たちが、いまおもしろい。

竹崎 『ゴーマニズム宣言』の小林よしのりとか。

斎藤 マンガ家の人たちの中にも、おもしろい人がいっぱいいる。国民は、ここまでいじめ抜かれたわけでしょ、ここまです来たなら「猿の惑星」じゃないけど、反逆するしかない。

しま もう怖いものはない。

斎藤 私たちは失うものはない。バブルで儲かっているわけ

でもないし、土地も財産も利権もない、知名度もない。それは強いと思うんですよ。

しま 私もそう思う。もう一步なんですよ。

斎藤 江戸の町衆がなぜ強かったのかと考えると、やっぱり連帯があつたからでしょ。町「衆」だったんですよ。だから「お上」と対等にやれたんです。

自分の金を他人に託さない

田村 遅れて来たので、話の流れがわからないところもあるんですが――。今、澱みをどう動かしていくかということと、

「お上」意識との関係を考えてみたときに、たまたま先日、

住専の問題に関して中京大学の河宮信郎さんにインタビューしたとき、国家財政破産のときでもない現実を聞いたんです。

いま国の借金、国家財政の債務が七五〇兆円あるそうです。

一万円を積み重ねると七千五百キロ。さらに財政投融资の残高や地方債の債務、九四年に決まったとおり「公共投資新基本計画」に六三〇兆円が支出されたら、公的債務は元金だけで千四百兆円になるんですって。なんと国民一人あたり千百

万円を超える債務だそうです。そして、それはほとんど返せない。しかもその借金、財政投融资は私たちの郵便貯金と厚生年金から出ている。郵便貯金は二一〇兆円の残高があるけれど、ほとんどはすでに使われてしまっている。だから、私たちの郵便貯金も厚生年金ももう戻ってこない。それらのお金は公共事業という名のもとに「もんじゅ」を造ったり、本州四国連絡橋や長良川河口堰を造ったりということに全部投じられて、自然をものすごく破壊している。

千五百億円かけて強引に造った長良川河口堰は、せき止めた水の需要がなく、一時的に止めただけで、水は使用されず流されている。それどころか、せきとめたところで水質が悪化し、川の生態系を壊している。要するに、建設費を使って、自然をぶっこわして、負債だけがふくらんだ。そこで河宮さんが言うには、税金による住専の負債補填の反対を叫ぶだけじゃなく、まず自分の郵便貯金を一銭残らず引き下ろすか、一銭も預けないことが有効じゃないか。それだけで日本の財政はバニックに陥るだろうと。この話を聞いて、あっと思っただんです。私たちは自分のお金の行き先を確かめないで安心して、税金の使い道にしても、郵便貯金でも、銀行預金を

でも、誰かに委ねてしまっている。これはどういう意識なんだろう。最低限、こんなに国家財政をめちゃくちゃにしているあんたたちには一銭もお金を貸さない、使われたくない、自分のお金に関しては責任を持つという態度を一人ひとりが取れば、もしかしたら今の澁みを動かせる。政党をつくることと別の視点で、動かせる可能性があるんじゃないかって感じたんですけど。

斎藤 そういう視点も、とても大事ですね。

田村 今、世の中が澁んでいることに対して、自分が責任を持つ表し方がいろいろあると思うんです。

斎藤 民間の会社はリストラで二割とか三割スリムにしたわけでしょ。なぜ国が民間と同じことをしないのか。十四兆円もの赤字国債をなぜ平気で新しく起こしたりするのか。そういう議員を全部クビにするぐらいのことをやらなきゃダメじゃないか。……ちよつと過激な言い方ですけど。

わたしたちは、過激にやれる

しま 田村さんがおっしゃったように、実際に自分の預金を

全部同じ日に下ろそうとしたらバニックになる。する、しないは別にしても、そういう運動があるっていう情報を、私たちの側から流す必要はあると思う。

斎藤 郵便局に下ろしに行つて「前日までに言ってくれないと、お金ありません」って言われたことがありますけど。

しま 皆、自分の貯金を下ろしに行つて「お金ありません」って言われる。それこそ大変なトピックになるでしょう？

斎藤 今、銀行でそれをやろうって言ってるけど、なるほど、銀行より郵便局の方が有効ですね。

田村 まず、そういった情報を知ることですね。住専のことって、新聞を読んでも本質がわからない。マスメディアは何が正確な情報なのか、その中身を伝えるべきでしょう。マスコミはその点をきちんと考えていないんじゃないか。

斎藤 今、ようやくやり始めたけれど、九二年に三和銀行がこれこれの理由で住専を処分したいって、大蔵省に提案してつぶされているわけでしょう。その時の大蔵省の局長の実名を報道してマスコミがバンバンやれば、少しは効果があったかもしれない。

竹崎 一番過激なのは、その借金を背負う次の世代を産んで

やらないことかな。

しま 一年でいいから、女たちは子どもを一人も産まない。

斎藤 古代ギリシャの時代から、アリストパネスが提唱してますね。

竹崎 ひのえうまの時、ガタツと出生率が下がったんだから、やる気になったらやれるわよ。

しま 本当に怒ったらやれる。一番簡単で、有効。意志さえしっかりしていれば、不妊運動の情報もいっぱい流す。

斎藤 ありとあらゆる手段で、あちらからも、こちらからも火の手が上がれば、向こうは対応に追われる。

しま こちらは楽しんじゃう、余裕たっぷり。

ズブのしろうとだから、やれる

斎藤 今、国会解散請求をしたいと市民運動の人たちは思っているけれど、小選挙区制に対抗できるものがないから沈黙しているわけね。敗れてもいいから精一杯やるということであ、流れは変えられるんじゃないですか。新党つくって、重点的に二十議席、いや五十議席は取りたいですね。ズブのしろう

とに何がやれるかって言う人も多いけれど、菅さんだってズブのしろうとだからやれたんじゃないですか。私たちにとつて新鮮でその、考えることが。

しま 「お上」の匂いがついたら、できなくなる。

斎藤 後ろに何の利権もくっついていないから、発想がすごく純粹でしょ。ものごとの真実に近いところに立っているから、変な足の引つ張り合いはしないでしょう。私たちもズブのしろうとの強みを生かして、おもしろおかしくやりませんか。

芦澤 それにしても、どうして市民運動から生まれた党がでないのか——できかけては潰れを繰り返しているでしょ。その理由がまだはつきり分析できていないんじゃないかと、思うんです。結局、名簿で誰が上位になるのかとか、そういうことで潰れてしまう。

斎藤 そういう問題よりも、具体的には、事務局に「政治カルト」を入れないことだと思う。「政治カルト」に入られると、それこそしろうとはひとたまりもない。気がついたときは、もう挽回不能だと、体験してやつと気がつきました。でも「政治カルト」はズバ抜けて有能で、最初、みんなをすぐ

に心酔させてしまふんです。事務局なんて面倒だから、それをするという人が現れると、ついまかせてしまいがちだけど、そのへんがキイポイントかもしれないですね。だから一気にパワーを集めて、新しい党を作ってしまったわないとダメですね。私は、政党っていうより応援団をつくったほうがいいんじゃないかと思うんです。まず、応援団が大勢名乗り出て、世直しのためにこれは、と思う人を推薦していく。そういう計画を新聞広告に出したらどうでしょう。

しま 新聞広告からやってみるのはいいアイディアだと思うけれど、高いからね。

斎藤 初めは三十万円ぐらいの小さい広告でもいい。うんと小さな字で組んで「えっ?」と思わせるとか。

「朝まで怒る女たち」の企画

しま もし、テレビでやるとしたらの話ですけど、怒る人ばかりじゃなく、「そんなにあんた、怒るだけじゃしょうがないよ」っていう人もいた方がいいですね。ここで今話している場の縮図みたいになるといいと思う。いろいろな切り口で

怒る人がいたほうがおもしろいし、男性もいたほうがいい。

斎藤 北京会議で、上野千鶴子さんがやったみたいに、ニコニコ笑いながらキューキューキューッと抑えていければね。

しま 名の売れた人は出さない。出しちゃうと足を掬われる可能性があるから。

斎藤 有名人でも、本当にガッツのある人で、日和らない人ならいいと思う。そういう人も二人か三人くらいいた方がいいと思うんですよ。

しま 見てもらうためにはね。

斎藤 この間、12チャンネルで特別番組を組んでくれた時、そこに出演した人たちは「がんばった、バンザイ！」って感じだったけど、ディレクターに聞いたら「やっぱりしろうとの限界ですね」ってこぼしてました。

しま それ、どういう意味なんですか？ きちんと話すことができないまま、成功したって思ってしまう、ってことかしら。

斎藤 テレビは一発勝負だから、ポイントをビッピッと突く人がいないと成功しない。ある程度、場数を踏んでパツと言えるような人も出す必要はあると思うんです。間髪入れずパ

ツと反応して、その発言の意味を、足を引っ張るんじゃないく即座に皆で補強していく。

二方 「朝まで生テレビ」で福島瑞穂さんが司会をやつて、女性だけが出ていたのがありましたね。

斎藤 何のテーマで？

二方 いろんなテーマが盛り込まれていて話が拡散してしまっていた。それに時間を切られるのか、福島さんがやりにくそうだった。

斎藤 いろんなテーマを詰め込むのじゃなくて、「なぜ世の中おかしいの」にテーマを絞りたい。

二方 そうしないと話が拡散してしまう。福島さんが司会した番組を見て痛感したのは、やっぱりディレクターや番組製作者は男の人たちで、うまい具合に「女たちは怒ってるぞ」って、おもしろおかしく作られてしまった。

芦澤 しまさんは、やっぱり誰かのネームバリューを活用するやり方はよくないというお考えですか？

しま いいえ、うまくいく見通しが持てるならいいと思うけど、ネームバリューに依存するのはよくない。だって、ネームバリューのある人となない人は、対等でしょ。

芦澤 どんな集会に出て、パネラーが滔々としやべるよりも、フロアからの発言のほうで断然おもしろい。私は最近、普通の人のほうがおもしろいなって思っんです。

しま そういう人を中心に据えて、「あーおもしろかった」と言えるような演出をしたいですね。

斎藤 今、もう一つ構想を練っているんです。七七年に「女の政局大演説会」をやったんですね。昔、女は政局演説会なんかやれなかったでしょ。それをもじった催しでしたけど、すごくおもしろかった。また、そういうのをやろうともくろんでいるんですけど。

竹崎 でも受け取る側が、パツとまとまった話のできる人の方を望むから、そういう人が重宝されるわけでしょ。この間の将棋の対局じゃないけど、ぐーっと考えている時間を忍耐して見ていられる視聴者が育っていないとね。そういう受け手の条件にも問題があるんじゃないでしょうか。

斎藤 しろうにも、おもしろくて優秀な人がいっぱいいます。一度、しろうとの良さを実感してもらいたいと思う。

田村 テレビを使つてのそういう企画は、インパクトがあると思うけれども、今、普通の人たちがものすごく言いたがっ

ているでしょう。何かおかしいんじゃないかって。だから、テレビでやるだけじゃなくて、家庭や職場、それぞれの地域でこういうことを話そうよつていう動きをつくっていきたい。手づくりの動きとマスメディアの活用と両方やりたいですね。

斎藤 田村さんのおっしゃった小さな集会を積み重ねて人材を発掘したり、発言の仕方を訓練していくと、点が線になり、面になっていく。ポテンシャル・エナジーは、もう全国のどこにもふつふつとわき上がっていると思いますよ。

街頭の集会なども、今までテレビ局はいいささい取材しかつたけれど、PKOの時でも小選挙区制の時でも湾岸戦争の時でも、本当に人の胸に沁み入るいいスピーチが山ほどありましたよ。高いギャラを払わなくても、素材は至るところにあるんです。一人ひとりの個人は変わってきている。それに一番鈍感なのがマスメディアではないかと思えますね。

普通の女たちが変わることの重み

芦澤 やっぱり個人が変わらないと世の中変えられないんだって、最近思っんです。「あー」に「めじゃーなりすとのめ」

というページがあるので、佐賀新聞の女性記者の方に執筆を

お願いしたんです。佐賀では、北京会議に行った女性たちのことで、じわじわと変化が起きているらしい。おっかなびっくり参加してみたという感じだったのに、普通の女たちが行って体験してきたことが地域に確実に風穴を開けつつあるって、彼女は言っていました。北京会議に行った女性たちが、そういういくつかの「点」を「ネットワーク」として繋げていければ、地域を根っこから変えるパワーになりますよね。

北京会議に行った女性ジャーナリストの話でも、地方紙の記者の話の方がおもしろかった。地方紙の女性記者は数が少ないから、女性同士のネットワークが結構あるみたいなんです。彼女たちは、地元の女性の情報をいっぱい持っている。地方のメディアにつなげていく企画ができればおもしろいし、同時多発的に変えていく力になるんじゃないかと思っています。

しま とてもいいポイントだと思う。地方紙の記者の方とのネットワークなどは「あごろ」でおわかりなんでしょ。

斎藤 ええ、かなりありますね。「あごろ」の拠点が全国にありますから、連絡はとれます。「女たちの怒り」は、むしろローカルからのほうがおもしろいかもしれない。

市民運動にも「お上」がいる

斎藤 時々、地方に呼ばれていくと、女性たちは皆生き生きしている。いい運動をやっている。姿勢が新しいんですね。

最近、市民運動も東京ではすごくやりにくい。牢名主みたいな人がいるわけ。それが一種の「お上」なんです。市民党がどうして敗れたのかというと、「お上」が市民運動の中にいたからだと思う。この前の参院選で市民党をサポートしていたのに、途中で降りたのは、手法が市民運動の発想じゃなかったからです。例えば予算資料を見て、こういうところはおかしいんじゃないかって質問したら、それからは必ず配布資料を回収するようになった。資料をメモしようとする、幹事が隣に座ってにらみつける。運動の中に「お上」が生まれたのでは、市民運動もオシマイ。

しま 東京のぶざまさに比べて、地方でいい運動が広がっているというのは、どんなパワーに支えられたんでしょう。地方にも「お上」はいたわけでしょう。

斎藤 伝統的な強い「お上」がいたからこそやろうとしたん

じゃないですか。

しま それを超えて今、生き生きといい運動ができてるのは、どういう過程だったんでしょう？

斎藤 運動そのものは、大都市よりも歴史がないというか、手あかにまみれた「運動家」がいない。女たちだけでも何かできるぞって、女たちが気づいて立ち上がったからじゃないですか。

しま 地方のお上って、まだまだ強力なところでは凄いでしょ、東京以上に。でも東京みたいに抽象的なお上じゃなくて、具体的に見えやすいお上だから闘いやすいってことはあるでしょうね。

斎藤 あると思いますね。地方の女たちは、自分たちが目指す方向を「反権力」とは言わない。そういうやり方がすごく巧妙ですよ。江戸の町人みたいに。しかも、おもしろおかしく楽しくやる。地域の音楽やってる人、絵をやってる人、おもしろい人たちをどんどん組み込んで、思わずひきこまれる方法をちゃんと編み出している。学ぶことがたくさんあります。しま 今、東京の歩行者天国に活気がない。以前に歩行者天国でいろいろやったことがあるんですけど、今はそういう雰

囲気じゃない。

斎藤 原宿も新宿のホコ天も中止になるんですよ。昔から権力者は広場Ⅱあごらを恐れたっていうけれど、相当警戒しているんじゃないかね。

しま 民衆のパワーが「お上」にとって一番こわいから。

斎藤 だからお祭りや市（いち）みたいに、こわくない形でやれるといい。

二方 フリーマーケットがずいぶん広がってますから、そういうところでイベントの形で使わせてもらったり——。

斎藤 そこで誰かが大演説やってもいい。古代ギリシャのA GORAのように、野次馬がゾロゾロ——だったら、しめたもの——。

しま 「お上」の問題で、もう少し回を重ねましょうか。堂々めぐりしているようでも、とても大切なプロセスだから。「自立の心理学その二」を作るとき、「女たちの、お上からの自立」をサブテーマにできるかもしれない。

斎藤 小選挙区制の選挙の前につくりたいですね。新しい流れの手立てになるように。

(二月二十七日)

「お上」ってなあに III

「お上」はじつはよりも実体

しま 「お上」の正体をめぐってずっと話してきましたけど、月に一度ここで語り合うことが私たちにとつてどういう意味を持つのか、もう一度確かめたいですね。

田中 私はやっぱり、「お上」っていうことがピンとこないんですね。意識の中の上下関係はわかるんです。でも上の人が「お上」というと、必ずしもそうでもない。

しま 社会的上下関係があつても、きちんと対等に対処できれば、相手は「お上」じゃない。一見、話を聞いてくれるようでも押し切られてしまつたり、こっちが結果として翻弄されるなら、相手は「お上」になる。今、政府は私たちが選んでいるから、制度としての政府は「お上」じゃない。でも向こうが「お上」のようにふるまい、こっちがきちんと対処できないとき、政府を「お上」にしてしまふ。

田中 「権力者」というとずっと入ってくるんですけど……

「お上」っていうことは私にずっと入らないんですね。

しま 戦前の権力者は「お上」だったっていうのは、わかるでしょう？

田中 ええ、確かにわかる。

しま そのイメージがわかれば、それが現代でも残っている新たに生んでいるのかな——その実体を「お上」ということばで表して考えている、ことばにひつかりがあつても、現代の「お上」的存在を捉えていればいいんじゃない？

田中 最近、新聞に何度か「お上」って言葉が出てましたね。しま ここ一か月ほどの間でしょ。

田中 ええ、そうです。

二方 「お上」っていうのは、官僚を指すとはつきりする。

私の区で今、直面しているんですけど、区の社会教育施設の使用を有料化して、値上げしたいんですね。それに反対する区民に有無を言わせない。請願書の審議もしないで、あつという間に区議会を通過してしまつた。区は「お上」の位置にいて、こちらがどう騒ごうと絶対的な力をもつて思いどおりにやつてしまふ。やられてしまふと運動してもなにも動かせない。そういう形が「お上」だっていうとはつきりする。

田中 確かに最近住民無視でことをどんどん運んでしまう。今までなら「聞きましよう」っていうポーズはあったのに。そのあたりの実態はわかるんです。

二方 聞かなくてもいいって、思ってしまったている。

田中 それに対して、こっちは何の手立てもない。

しま そういふふうに変わってきた要素が、向こうとこっちの両方にある。向こうが勝手にやる姿勢になるとこっちもやられてしまう。結果として、気持ちはあっても具体的な手立がない――。

二方 気づいてみたらそうになっていたというのは、きっとぼんやりしていた時期があったのかな？

田中 向こうはずっとそうだったんじゃない？ 六〇年安保だって、あれだけ大騒ぎしたけど通しちゃった。

しま 強行採決で。

まず、わたしが行動する

田中 消費税のときも八〇パーセントは反対していたのに、すつと通っちゃって、結局、反対のしかたが下手なのか、そ

を考えないとだめなんでしょうね。

二方 そう、長年やってきても結局ダメということがある。

田中 違う方向が必要だってわかってきたけれど、それが何か、まだ考えつかない。

しま うまくいく方法は、やってみないとわからない。反対する具体的な中身を練ってやってみないと、例えば、消費税に抵抗するには、ある期間最小限しかモノを買わない、しばらくは食べるものも半分、なんて多くの人が実行したら政府は脅威だし、経済も混乱する。抵抗の行動を一人ひとりがやってみるしかない。

二方 それもたくさんの方がやらないとダメでしょ。多くの人に自分たちの状況に気づいて、行動できるようにならなくてもいいと……。

しま そのとおりなんだけど、抵抗はまず「わたし」がやるわけでしょ。たとえ他の人がやらなくても私がやるっていう意思表示が第一。その原点がないとまるまるダメになってしまう。私一人が抵抗の動きをしなくても生きられてしまうっていうのが大きなカベなんじゃない？

田中 そうですね。やっぱりどこかで諦めている……。以前

に、デモに行くのが怖いって言いましたよね。何が怖いのか考えてみたら、自分がそういう行動をするのが怖い。そこで疎外されるのが嫌だって思う。デモはまわりの人に対して、自分はこう思うっていう意志表明でしょ、それが嫌なのかなっていう面と、もうひとつは対警察、ニラまれるのが怖い。

しま 本当に怖い目に会ったことはないのに、お上は怖いって観念が固定してしまっているのかな。

田中 でも、第三世界で、一人でも立ち上がってがんばっている人たちがいるでしょ、あの人たちはどうして怖くないんだろう。彼女たちは、自分は自分っていう感覚がきちんとしているのかな。他に賛成者がいなくても、自分が正しいって思う点は貫く。私はそういう自分を建てられない。だから怖いって感じているのかな。

しま 彼女たちも素朴な感覚として、怖いっていうのはあると思う。だって、撃たれてしまうかもしれないわけでしょ。

田中 ええ、ええ。

しま それはあるけれど、相対的に、怖さで引つ込むよりもこんなに理不尽なことは許せないっていう挑戦の方が勝ってしまう。個がしっかりしているかどうかの条件だけじゃなく、

切羽詰まった状況を受け止められるかどうかの違いが大きいかな。日本だって今、切羽詰まっているのに、意識は切羽詰まっていない。

田中 そう、切羽詰まっていなんですよ。

しま 現実の多くは隠されていて見えにくい。切迫してない。でも頭の中では「これはまずい」とは思っている。身体感覚まで切迫して気づいたり、抗議行動をするという状況ではない。その違いがとても大きい。

田中 でもこのままいったら日本はおかしくなるっていう気持ちがありますね。だから少しは言っていないと、という気持ちになり始めている。

二方 子どもの問題、人間関係、いろいろな面でこれからもっとひどくなるような気がする。でも、とりあえず今、その危機感が目の前に迫っていない。これからが危ない、その将来がどんどん先へと延ばされて、今、動き出さない。

しま 危機感が先延ばしされていく状況に、心底から不安や怒りを感じないでいられる。ハートで怒ることと、見通しをもって行動することが、まだくっついていない。

小さな手立てを、多様に

田中 私は最近、けっこう腹を立てています。

二方 じゃ、どういふふうに動いたらいいの？

田中 納得のいくやり方はまだ見つからないんだけど、例えば、従軍慰安婦の問題で署名を集めるとか——先頭に立つことはできないし。でも、沖繩の問題でこの間、一人で比谷の集会に行ったんですよ。それでまわりの人を誘えるようになればいいんだけど。

しま 先頭に立つとかじゃなく、田中さんが一人で日比谷の集会に行ったという、その行動に重みがあると思うの。うんと細かいところで、今まで黙ってしまつたのを黙らなくなつたとか、そこが一番大きい変化でしょ。

田中 まだ今のところ、賛成してくれそうな人にしか言えない。抵抗されちゃうと対応できない。

しま 「そんなに抵抗ある？」って、対話できるかな？

田中 「私はこう思つてやつている」と言えるようにはなつたけれど……。私は人と話せなかったから、自分で言えるよ

うになつたのは相当の進歩というか、以前とは違う自分があるようになった。

二方 私は逆に、子どもの時から口達者で思っていることをボンボン言つてしまつてぶつかりながらやつてきて、イヤな思いを何度もしてきたんですね。子どもも夫もまき込んでしまつて、家族の中では「問題が起こりそうなのは、お母さんに言わない方がいい」「みたいな感じですね(笑)。いやがらせを受けても私は平気で、何でそんなことするのつて言えるんだけど、余計いやがらせをされて、子どもはそれがイヤだから、お母さんには見せないほうがいい、みたいになる。それで私は、ちよつと落ち込んでいる状況なんです。

しま でもそのまま納まらないでしょ？ 揺れ動くけれど、いやがらせをそのままやりすごすわけじゃない。

二方 それはそうですね。

しま いやがらせにやられてしまうと、「お上」を認めるのと同じ精神状態考へてでもいいのかな？ それじゃ、どういふ方向に進めばいいなんて簡単には言えないけれど。

田中 ジグザグでもいいし、方法はいっぱいあつていい。言ひなりになるようでない方法もありますよね。

芦澤 声高に叫ぶんじゃない、暮らしの中で態度で表していかみtainな感じですか。

しま そういふほうが、お上は怖がると思う。

田中 ということは、自分の生き方、この一線は譲れないというものは持たないと。

しま それは、皆それなりに持っているのに、持っていないと思うのかしら。自分の線が何もない人はいない。

田中 ないというよりも、人に言われたことがそのままいっていう生き方の人もいるでしょ。

しま すべて言いなりになるわけじゃない。どうして「自分がない」っていう言い方をするのかな？ 他人から踏み込まれたら、絶対に抵抗するテリトリって、皆あるでしょ。

田中 そりゃありますね。だれにでも。

芦澤 自分がないんじゃない、気づいていない。他者や社会との関わりから、初めて自分がわかるっていうことがあるし。

反発や共感を通して気づく

しま まず、嫌な思いをしたり反発したりしながら気づくこ

とがある。

芦澤 嫌な思いだけではなく、共感するとかそういう積極的な面からの気づき方もありますよね。

しま 自分に引きつけて深く発見できることもある。普段は自分の内に引きつけるまでにはいかずに、お互いの関係、その場での共感で終わることが多いかもしれないけれど。

田中 それは芦澤さんの言われたことと同じですか？

芦澤 重なると思いますよ。初めて会った人とでも、ずっと共感できたとき、その人の考えと通じる自分のことを考えたり――。

しま 共感をもう一步突っ込んで、自分が深まる。

芦澤 そうですね、それは反発でも同じかもしれない。そこから自分の問題を深く考えられる。

しま 相手の状況を深く受け止めると、それが自分をわからせるきっかけになる。この間葛飾区の女性グループの学習会で、こんな話を伺ったのね。区が提供した二年間にわたる女性問題の研究コースがあつて、共感したり、意見の対立があつたりしながら共にやつてきた。最終回にお互いの感想を語りあう中で、関場さんという方が「十五、六人で参加した仲

間が、一人ひとり皆こんなに違う。その独特な凄さに感動し

てきちゃうのね。

て、涙が出てしまった」って。人権なんていうことは全く使わずに、共感も反発も含めた体験を通して、個の貴重さがものすごい迫力で伝わってきたんだと思う。一人ひとりが違うことの重みを、ずっしりと受け止めてしまった。

芦澤 すごいですね。均一を押しつけることへの反発の上に立ってなんでしょうね。

しま 発言や考え方の差というレベルじゃない。あー、こんなに人間、みな違うんだ、違って共感できるんだ、という感動、それはすごいことだなんて、私も感じてしまった。

芦澤 そういう実感を抜きにした「人権」なんて虚しいですね。

しま 自分の実感の核のようなところで動いていけば、自分の中の「お上」の問題にもつながるんじゃないかしら。関場さんが「二年間の報告書はもうどうでもいいくらい感動した」と言ったら、区側に「報告書は書いてくれなければ困りますよ」って即座に言われてしまったんですって。感動の重みを、まず区の方もしっかり受け止められるといいのに。

田中 ことばで、ぱっと「報告書は大切」っていう感じが出

素朴な感性を切り捨てると「お上」になる

芦澤 彼女の感動がわかっていない。しっかり伝わらない。

しま その素直な気持ちを切り捨てるところに、「お上」の権力がある。

二方 目に見えない気持ちや感動は、行政にとって形として作り上げていくものにならないわけでしょうね。昔思ってたですけど、原発の問題を推進していく官僚だって、家に帰れば普通のお父さんやお祖父さんなんだろうなって。その感覚でものを考えられないのかな、立場だけじゃなく。

田中 その感覚はデモのとき、警官について感じましたね。この人たちは家庭ではいいお父さんなんだろうに、って。

しま 仕事とプライベートな暮らしの、心の橋渡しが無い。

芦澤 沖縄でも、知花昌一さんの土地返還のデモのとき、阻止する警官も沖縄の人で「すみません、命令なんです。ごめんなさい」って言ったそうです。沖縄人としての自分と、お上の命令で動かなきゃならない立場の自分が、ものすごく引

き裂かれていたと思う。

しま 六〇年安保のときも、当時の機動隊にも同じことを感じました。自分と同じ年代の学生を盾で押し返すんだけど、「ちきしょう、オレだつて学生の立場だったら——」って思ったんじゃないかと。いったんお上の手先になつたらすごい軋轢があつて、個人としての自己とは分けざるを得ない。この問題をこれからの考えに組み込めるかもしれない。

田中 私の区でも社会教育の施設が有料化されたんです。その過程で社会教育主事の人が有料化反対の立場で出てきて、「一緒にやりましょう」って言っていたんですけど、彼らは「僕は今は行政の人間ではないので……」と何度もくりかえすんです。私は逆に、相当行政の人間であることを意識してると思いました。区民と共にやる場に来てさえも、行政の間を背負っている。個人に戻れない。

しま 個人としては有料化反対。でも、行政の人間だから上からの決定に対してはどうしようもない、っていうこと？

田中 表立って反対できない。上から睨まれたって別にクビになるわけでも、左遷されることもないと思う。でも、やりにくい。

しま 左遷されるかもしれないとしても、それを受け止める感性はない。

田中 実質的な損失はないわけでしょ、でも、立場としてそういうことはできないって思つてしまふのかな？

しま 施設使用料の値上げは、最終的にどこで決まるの？ そのプロセスで、行政側の現場で働いている人の意見をきちんと聞くしくみがあるんだろうか。その機会が全くないなら、上で決めて値上げだけを下に降ろす仕組みの改善を申し立てる方法はある。

二方 私の区では、事前に区民に漏れないように、漏れないようにやっている。聞きにいくと「そんな話はお出ません」つて。それでいて、あつという間に区議会にかかつて一回で通つちゃう。事前に説明して下さいつて要求しているんですけど、隠しまくっている。共産党の議員さんは、議会の直前まで書類が貰えなかったそうです。

田中 やり方が姑息。

しま まさに、いじめの構図ね。

二方 請願書を審議すべきだつて共産党の議員さんが言つても、それは必要ないつて多勢で押し切つてしまつて、傍聴

に行った人が言っていました。

しま その体質は前からずっと引きずっていたけれど、今までは民主的に装っていたのかな。

二方 民主的っぽくしていた。

しま 今まで装っていた部分は全くウソじゃなくて、自分の着物だと思っていた時期もあったかも知れない。でも本物になっていなかった。住民の請願を通したこともあったのに、それが今、社会教育の領域でひどくなってきた。

二方 どこも、みんなひどいですよ。

女性のパワーは、恐れられ始めている

しま やっぱり女性のパワーを恐れていると思う。今のうちに適当に抑えておこうと、手を打ち始めているんじゃない？

二方 社会教育で女性を啓蒙しようとしたら、皆、思ってたより勉強して、意見をどんどん言いはじめた。このままこのパワーが育ちすぎたら、自分たちがやりにくくてしょうがない。

しま それが「男女共生」っていう政策に表れているのね。

「すでに男女平等は実現した、これからは仲良くやっていこう」という政策に切替え始めた。

田中 最近特に「共生」を前面に出してきましたね。

しま 共生っていうのは、男女の役割は違う、違う者同士が協力しようっていう概念なのね。異種の生物が互いに助け合るのが共生、辞書にそう書いてある。まさに行政の意図は平等じゃなく共生なんじゃない？

芦澤 沖縄の人に「基地と共生しろ」とか言うのと同じですね。

二方 住民がしっかり民主的な力をつけると、やりにくいんでしょね。

しま 行政側が本当に民主的に育っていたら、そういう住民を歓迎するのにな。

二方 やっぱり向こうは、「お上」意識なんだ。

田中 自分たちの思うようにやりたい。

しま 役人個人としては、そういう姿勢を意識していないでしょうね。だからシステムに無批判に乗っってしまう。

二方 地方自治体にも国の管理機構と同じ問題が出てきている。接待費の問題だって決して本気で取り組もうとしない。

「ボランティアは、タダ働き」

という意識はどこから?

田中 女性フォーラムの公募があるでしょ。あれはボランティアだと思うけれど、最近、交通費を出せっていう動きが出ているんですよ。お弁当は出ないの、とか。自分がやりたくて参加するなら、自前で当然と私は思うけど、そうやって行政は女性たちをタダで使っているという言い方もあるわけ。

しま ボランティア活動なのか、予算を組んだ仕事への応募なのかを、役所側がはっきり提示しなくちゃいけない。

二方 最近、ボランティアでも交通費を出せっていう発想が多くなっている。若い人たちは仕事をしながら女性フォーラムにも関わっているんですけど、あんなに時間とエネルギーを費やしたのに、結局タダ働きなの? なんていう雰囲気になっていく。能力のある女性たちなんですけど……。

しま 女性運動の根っこがあやふやだったり、行政の理不尽さへの怒りがないのかな? お金を出さないっていう怒りにはなるけれど、女性問題を通して行政を動かしていくという姿勢じゃない。

二方 「女の人をタダ働きさせることにあなたたちは黙っているけど、要求しなくちゃいけないのよ」って言われちゃうと、一瞬迷ってしまったりする。

しま 市民が自分たちの創造活動をしたり、行政にもの言って報酬をもらおうなんていうのはおかしい。

田中 ボランティアの概念がいまいちになってきている。

二方 区が報酬を出す仕事の場合は、向こうが選考する。

田中 フォーラムも、選考はあっても性格が違う。

しま 自発的な活動なのに、交通費くらいは出すべきだっていうのは、お上に対決する感覚がないからじゃない? 雇われるんじゃない、自前でやるのは当然。そのあたりの位置づけが、どうして明確じゃなくなるんでしょう?

田中 無料奉仕を全てボランティアだと思って、考え方をシフトさせてしまっている。

「お上」に乘せられて、ボランティア?

しま 要求されて奉仕するのではなく、「私の方から自発的に」がボランティアでしょ。その行為が相手のためにもなる

し、同時に私の喜びでもあるような活動がボランティア。人のために何かしたいのがホンモノなら、それは自分の思いを果たせる活動でもある。でも、ボランティアが一つの流行になってしまつて、「ボランティアしなきゃ」という感じになっているんじゃない？ それに、主婦労働は無償という積もる思いへの抵抗が混同されて、交通費くらい出してほしいと思うのかもしれない。

田中 そうですよ。

二方 私は「PTAはボランティア活動だから」って言われたけれど、何かおかしいと思った。ボランティアということばが、私の感覚からずれて安易に使われている。

しま PTAはボランティア活動じゃない。親と教師の関係として作られたシステムでしょ。それに参加するのは親の義務でもあり、権利でもある。ただ、気持ちとして、自発的に参加するときボランティアと同じ精神状況になると思う。

二方 今、ボランティアが子どもの成績評価の対象になっているでしょ。

しま 本来の意味をいかにげんにして、都合のいいようにボランティアが解釈されている。そういう方向をお上が打ち出

しても、問題に気づかないと乗せられてしまう。日常的にお上の共犯者のよね。

二方 お上をすんなり認めて、私たちがお上をつくり上げていっちゃうことになる。

しま 今の二方さんの例で「PTAはボランティアでしょ」って言われたときに「えっ？ PTAはボランティア？ ボランティアの意味をちゃんと考えてから話したいけど」とか、対応できるというわね。

二方 お金が出ないのがボランティア、っていうとらえ方なんですわね。「私はPTAをボランティアとは思っていないわよ」って言ったんですけど。

田中 そのことばがすつと出ればいい。私はまだ出ない。

しま ことばに出るっていうのは、自分なりに中身をきちんと捉えているってことね。

田中 そう。「えー？」で終わらないわかり方をしている。

しま まず「えー？」でもいいんだけど、次にその中身をことばにしてみても、うまく言えなかったらちよつと待つて、考えてから話そうとか、それでもいいんじゃない？「えー？」で終わると流されちゃうでしょ。「えー？」の意味をゆつくり

考えて、次のステップにつなげることが大事。

二方 私はPTAをボランティアのつもりでやっていないけど、あなたの感じとずれてるかな、とか。

田中 その人たちは、やむを得ずやっているっていう気持ちが入っているんでしょうね。そうすると、お金が欲しいになっちゃう。

しま 自発性と自分にとっての喜びの部分が消えてしまう。

「ボランティアしなくちゃ」になる。奉仕することがいいことだっていう印象が強すぎるかな。だから無理してもやらねばならない。

田中 阪神大震災の後で誰かが書いていましたけど、「好きだからやるんじゃないとボランティアじゃない」って。

二方 自分の存在を見つけてずっと続けている人たちは、自分に返ってくる部分を大切にしている。それは一般に言われる無料奉仕とは違う。

田中 外国で、教会などのチャリティーバザーがありますね。もし自分が出した食器とかが売れ残ったら、本人がお金を払って買って帰るんですって。そういうのが本当のボランティア活動だっていう見方もある。

しま 買って帰るかたちで、自分が出したモノが役に立つことを受け入れているのね。

田中 ある老婦人がそうしたという例らしいんですけど。

しま 私も考えつかなくなっただけど、ああそうなんだ、って、わかります。

何度も疑問符を切り返して、話し合う

二方 私の区で学校給食を老人に届けるボランティアがあるんですよ。

田中 区の仕事として介助サービスの募集をしている。「さわかサービス」とか言って。

二方 登録してサービスすると、後で自分が必要なときに見返りが受けられる。あれはボランティアじゃないのかしら。

しま いいシステムだと思うけれど、ボランティアじゃない。自発的ボランティア活動と混同しない方がいいと思う。

二方 そのあたりがよくわからないうちに、行政主導でどんどん進んでいってしまう。

田中 行政側に都合のいい解釈でボランティアっていうこと

ばを使って、普遍化していくところがありますね。それに対して「違わないか」って言ったほうがいいのに、「まあそんなにカタイこと言わないで」と言われてしまいがち。

しま そのとき「カタイことっていうのと、ちょっと違うんじゃない？」とか、対応していけるとね。

田中 そこで切り返すだけのものがない。

しま 「ない」って言うてしまっているのかな？ 田中さん

の中にいろいろあるのに、ないと思ってしまいう現状がある。

田中 切り返せるだけのものを、まだしっかり持てないでいる。疑問符としては持つてゐるんだから、ないわけじゃない。

しま その疑問符を少しでも投げかけて、お互いの疑問符を何だろうねって考えることが今、女性たちの学習の大切なポイントじゃないかしら。

田中 そうです。今、それをねらってるんですけど。

二方 なかなかそこまでいかない。

しま せめてもう一人、疑問符を受け止める人がいると、サポートしてもらいながら対話になって意見が広がる。一人だけだとやりにくい。

田中 それと、先に学習している女性たちがものごとを決め

つけてしまうことがあるんです。

二方 ある、ある。

田中 疑問符が疑問符にならなくて、別の正解をばつと出される。

二方 「それは、こういうことなのよ」って断定されるから、議論にならない。

しま 今、女性運動の学習が少しずつ着実に進んでいる中で、重要な問題ね。そういう断定で終わるのは、実は女性問題を先に学習していたのではなくて、「お上」の姿勢で学習していたんじゃない？ 女性運動の中の「お上」を揺さぶっていくには、断定されたとき「どうしてそうなの？」とか、常にこちら側の疑問符を返していかないと。そうするとまわりの人たちが少しずつ動き始めるんじゃない？ やってみないとわからないけど。

二方 実際やってみたらものすごくエネルギーが要って大変だった。ずいぶん逆らったけど、えらい目にありました。

しま 女たちの関係も男性社会と同じように、ハイラーキイになっている。

田中 別のモデルがないから、男社会のモデルを踏襲してし

まう。そこを突き崩すことが女性運動をやっている意味だと思ふんですけど。

しま たった二十年くらいの歴史で、しっかりしたモデルを描けないけれど、今の手探りはとても意味がある。

田中 私もそう思う。

しま ことばでは、ハイラーキイではなくネットワーク方式っていうけれど、相当大変なことね。ネットワークのイメージはあるけど、どこかで自分勝手になって分解してしまったり、問題に対処するとき今までと同じやり方に戻ってしまったり。でも、効率は悪くても、やりながら確かめていく価値がある。男性中心社会の事の運び方がおかしいと思う限りは、手探りにこそ意味があると思う。新しいモデルは、まだどこにもないでしょ。

二方 そういうふうにやっているうちに、こんなことじゃ時間を買うばかりだ、ばかばかしい、って言う女性が出てきちゃうんですね。

しま 女性問題が本当に自分の問題としてわかっていないから——。でもその気持ちは理解できる。ぐちを言ってもいいんだけど、どこかで、手探りでやるしかないってふっ切れる

といいのね。

二方 上に親分がいて、そこに合う意見を言っているうちはいいんだけど、合わない意見を主張するとあちこちから叩かれる。それでも引つ込めないで続けると、全体の雰囲気が崩れていくのがわかる。もうめんどくさい、争いたくないっていう人が増えていく。そういう経験から悩んでしまうのね。

田中 そこであんまりしんどかったら、いったん逃げてもいいと思う。場を変えてまたやってみる。

二方 何年もやってそれなりの場はできたと思うけれど、私の間違っているとは思えないからやめるわけにはいかない。

しま しんどくてちよっと手を抜く。そのとき、自分を流してしまふんじやなく時間をかけてまた考えてほしいっていう気持ちがあるというけれど……。もう辞めたいという人と、ほんの少しでもそんなふうに話せるだろうか、それを支えてくれるもう一人、第三者的な立場に立てる人と一緒に。

女性が「お上」にならない連帯を

しま いくつかの地域で、女性問題を学んできた人たちの世

代のギャップを聞くけれど、それは先に学んだ人たちは女性問題を学んだんじゃないくて、婦人問題を学習していたんじゃないかしら。

田中 何となく、わかる。

しま その人たちも変わる可能性はある。こちらの対話のトレーニングも必要。困るのは、先に学んだ人たちが行政側と手を組んで、制度的に動いてしまうことね。

二方 結局、そうなっちゃうんですよ。区との間に立つて、「まあまあ」ってこつちをなだめる。

田中 向こうと仲良くなると言いたいことが言えなくなるのかな。

しま 演出として、そういうことが少し必要ときもあるかもしれない。でも基本的なところでこつちと手を結んでいるなら「まあまあ」では終わらない。基本線がなくなると、なし崩しに「お上」の側に回ってしまふ。

田中 馴れ合いになる。

しま 私たちが「お上」ということばを使うのは、対決の姿勢がしっかりしているときじゃないかしら。理不尽さに対峙していく姿勢。

田中 思い返してみると、だんだん持ち上げられるとエライ所に自分がいたい。そういう思いがガンになるのかな。

二方 今まで私たちと一緒にずっと区に対決してやってきた女性が、教育委員になれなかった例があるんです。文化、学校、地域、女性の四分野のうち、女性の領域で彼女がなると私たちも期待していたのに、まだ実績の浅い別の人に決まって、彼女はものすごく怒っていた。

しま そのいきさつが腑に落ちなかったら、まず聞きに行く必要がある。

二方 聞きに行ったかもしれないけれど……それ以来、どうも行政に逆らわなくなった。対決ばかりしていると、ポストが回ってこない。

しま その場合、ご本人だけじゃなくて、彼女が教育委員になるべきだと思っていた人たちが支援していかなくちゃいけない。教育委員になることが問題なのではなく、何をしていくかで納得できる話し合いができるんじゃないかしら。

二方 行政側は、「お上」だから。自分たちに反対するところなるっていう見せしめなんですよ。

しま それだったら抵抗しなくちゃ。彼女と対立すべきでは

ない。

二方 任命された別の人は、決して悪くはないんですけど、まだ、こういう問題がわかっていない。

今、パワーが問われる時

芦澤 仕事しながらの参加でごめんなさい。どういう話になりました？

しま それぞれの体験からボランティア論が出たり、女性問題をやっている人が「お上」にさらわれるという話など。

芦澤 女性が権威になってしまうことね。

しま それに対して、具体的にどうやっていけるか。

芦澤 市民運動も、全く同じ状況ですよ。それが嫌になってやめる人も多い。たくさん人の権威が競り合うと運動がわかれちゃうから、うまくいかない。

しま そうなるのは、市民運動が本来もっている、理不尽な「お上」に対する怒りが消えがちだということ？ 怒りが核にあれば割れないし、割れてもまた新しいやり方で結び合おうとする。

綿津 NPO法案で、「財政援助を受けられるが監督もされる」というのが出てきた一方、政治活動をする市民運動には援助をしない方向が出てきていますね。援助がなかったらとても活動できない現実の中にはある。

しま こっちの心の決め方は二つ。援助はいらないとまず言うってしまったって、その中で立て直すか、援助を切らないでうまくやりながら、こちらの線は絶対に崩さない方を選ぶか。

芦澤 金を出させるけど、口は出させない。

綿津 向こうは金を出すんなら規制もするっていう「お上意識」でしょ。お上は金を出すなら口も出す。

しま こちらの姿勢がしっかりしていてパワフルなら、ルールを提案して、変えていけるかもしれない。援助はいらないって、言っていないかどうかが問題。

芦澤 私たちは集まると「なぜNGOは貧乏なのか」という話になるんです。

しま 貧乏でパワフルっていう発想は？

芦澤 だけどそれじゃ、専従の人が食べていけない。挫折しちゃう。

綿津 私たちへあごろゝの人は切実感がある。それにしても、

すべて上の方でパツとすり替えるでしよ、沖縄の普天間基地返還と有事への対応が抱き合わせになったり。

しま その危機感で、クリントン来訪の迎賓館に静かなデモのできる状況ではない。

綿津 そこそこ食べていける暮らしだから、身につまされる危機意識を持ってない人が多い。

しま 一番危ない憲法の解釈論に、しっかりした抵抗の動きができない。日本には憲法しか誇れるものはないのに、有事の中身をすっかり聞いて、その非現実性、非論理性に挑戦する女性たちの運動を起こしたいですね。

綿津 住專問題も、あつという間に予算通過してしまった。

しま 税金で補填しなかったら、あなたたちの預金が危ないっていうセリフが一番ズルイ。もうすでに、私たちの預金は食いつぶされてしまっているのに……。国民は「われわれの預金は、公共事業投融資で食われてしまっていることを知っていますよ」って、大声で言わないといけない。

綿津 末野興産の社長を逮捕して終わりにしようとしている。今まで全てこのやり方でしよ。

しま 食べていけるといふ感覚のままだと、すでにここまで

来ているのに、余程の事態にならないと国民は動かない。

綿津 皆、中流意識があるんですよ。

しま 中流意識って、本当に持っているのかしら。一応、食っていけるって感じているだけで、階級意識としての中流なんてないんじゃない？ ただ中流と思い込まされている。

芦澤 横並び意識ですよ。中流というのは。

田中 隣の人たちから外れないでいられる。

しま 今日具体例から小さな発見がいろいろあったと思います。個人としてどう感じているかを確かめ、それをより確実なものにして、どう動けるか。これは最も大切なポイントです。私たちの変化を積み重ねられるように続けませんか。

*

◆「自立の心理学」は毎月一回、二時間ほど学習会を開いています。次回は六月二十七日（木）夜七時からです。場所は東京・新宿の「あこら事務局」。地下鉄丸の内線「新宿御苑前」大木戸門口を出て、新宿通りを左に五十メートル、「緑苑」という喫茶店のあるビルの三階三〇三号。参加費は五百円です。この問題に関心のある方ならどなたでもどうぞ。飛び入りも大歓迎、お気軽においでください。

中村幸子さんの議員復職を勝ち取りました！

島根県匹見町の町会議員・中村幸子さんは、九三年五月から九五年三月まで町社会福祉協議会の会長を務めていました。その間町高齢者福祉センターの開設など、町の福祉に貢献され、議員としても町の老人保健福祉政策の策定をめぐって「老人は家庭で（女性が）見るのが基本」という町権力者の意見に異を唱えてきました。また、中国電力の五十万Vの高圧線電線設計計画にも、「町民に害を及ぼすものはノー」と言ってきました。

ところが、町議会は一月二十五日に「社会福祉協議会長だったことは、地方自治法九二条二項の兼業禁止規定に違反する」として、失職を決定しました。しかしながら、全国の約四割の自治体で首長・議長が社協会長を兼任しており、問題になったことはありません。町議会の決議は有権者の意向を無視した暴挙としか言えませんでした。

〈女性議員を支援する会〉は中村さんを支援し、二月から署名運動に取り組んできました。この運動は島根県から全国へ広がり、ついに四月二十六日、中村さんの審議申立てに対して島根県知事は「失職取り消し」の採決を出しました。その喜びの声のFAXが届きましたので、ご紹介します。

*

二月初め、中村さんの失職取り消しを求める署名運動を二百枚の署名用紙で始めてから、二か月で二万二千人を超す署名が集まりました。島根県内では、全国からの支援を背景に、中村さん支持の集会が次々に開かれました。松江市では女性グループ、出雲市では福祉関係者、益田市では労組が主催して集会を開き、中村さんへの支持の声を出しにくかった地元匹見町でも、四月十三日に八十名を集めて支援集会が行われました。

中村さんの失職事件は、「兼業禁止」という法律上の問題だけではなく、女性の政治参加、高齢者福祉、地域の民主主義など、多様な側面を持っていました。それゆえ失職問題への

アプローチの仕方は人によって違っていたかも知れませんが、中村さんの議員資格を取り戻すという一点で協力しあえたことも、勝利に結びついたと思います。

ご協力下さった全国の皆さん、ありがとうございました。

〈女性議員を支援する会〉

日本キリスト教婦人矯風会が創立一一〇周年決議

公娼制度の廃止、婦人福祉事業などに多大な貢献をされ、性暴力の問題や日本軍「慰安婦」問題にも積極的に取り組まれてきた「日本キリスト教婦人矯風会」は、今年で一一〇年を迎えました。

この記念の年に当たって、五月二十三日(木)、二十四日(金)に倉敷で開催された矯風会全国大会で「創立一一〇周年にあたって戦争・戦後責任告白と決意表明」が採択されました。その一部を抜粋してお伝えします。

*

先の戦争中、矯風会は本部会館を軍に接収され、大東亜省後援による興亜女子指導者講習会を十七歳以上の一般女性を対象に矢島記念館で開くなど、戦争協力の道を歩みました。

すべてを焼失し支部・会員も僅かとなっていた矯風会に、敗戦後米国から真っ先に届いた便りは世界矯風会ブルー会頭からのものでした。そこには「国と国とは戦ったけれども、キリストに祈らなれるお互いの友情に変わりはない。戦争中、私共はあなたの方のために祈り続けてきた」とあったのです。この言葉に「戦争に対して何もなし得なかった自分を恥じ、慙愧の念を新たにした」ガントレット恒子会頭を中心に、全国の会員の祈りを集めて、平和を願う決議が行われることになりました。一九四七年、戦後第一回の全国大会で「世界平和を念願しその確保を目指してきた本会は、大東亜戦争に際しいかなる理由の存したにもせよ能く之を阻止し得なかつた怠りと無力とを懺悔し、新たな覚悟を以て恒久平和確立のため最善を尽さんことを期し…」が決議され、矯風会の戦後の活動が始まりました。(中略)

戦後五十周年を過ぎて、戦後の活動に思いを馳せる時、先輩たちと同じく「怠りと無力」を懺悔すべきことが多くあります。私たちは、戦争・戦後責任を自覚しつつ、悔い改めにふさわしい実を結ぶことを願い、女性の家・HELPの働きや日本軍「慰安婦」問題などに誠実にとりくみ、世界の女性たちと連帯して平和を創り出し、差別や性暴力など人の尊厳

が犯されることのない社会をめざして、活動を続けていくことを決意いたします。

横浜セクシユアル・ハラスメント裁判

『あじら』二二七号でお知らせしました横浜セクシユアル・ハラスメント裁判 控訴審（第五回口頭弁論）は五月二十一日、東京高裁で行われました。

控訴人Aさん、最初で最後の本人尋問でした。つらさを感じるところえ、静かにはつきりと答えている姿が印象的でした。

——原告Aさんの入社と事件発生と裁判の経過——

九〇年五月 T社にアルバイト入社、十一月正社員登用

九一年二月 事件発生 同年八月退社

九二年七月 横浜地裁へ提訴、以来十回にわたる裁判

九五年三月 判決（敗訴） 控訴を決意

九五年九月～九六年五月まで五回の口頭弁論

仕事にやりがいを感じ、活き活き働いていたAさんだが、上司による性的嫌がらせが続き、極めて醜悪な事態となる。上司は事実をいったんは認め、形ばかりの謝罪をしたものの、

態度を改めず、会社社長に直訴したが適切な対応をとらなかったために、原告は退職に追い込まれた。長い時を経て提訴に踏み切る。

判決——主文

一 原告の請求をいずれも棄却する。

二 訴訟費用は全て原告の負担とする。

判決を受けてAさんは「判決については厳粛に受け止めています。しかし、判決は判決、真実は真実です。元からある真実を、さらに司法によっても確定しようと試みたのが今回の訴訟です。結果は『原告の請求はいずれも棄却する』でした。しかし、それが何でありましょう。真実はそのままに存在し続けているのですから」と述べました。

セクシユアル・ハラスメント裁判の意義は行為者だけでなく会社の責任を追及し、セクハラを防止していく社会的土壌をつくらせていくことにもあります。

ところで労働省は、九三年十月にセクハラの定義を「相手方の意に反した性的な言動をし、それへの（相手方の）対応によって仕事上の不利益を与えたり、就業環境を悪化させること」と発表しています。

判決内容から、裁判所がセクシユアル・ハラスメントの構

造をいかに理解していなかったかが明らかとなりました。原告と弁護団は裁判所がわかるまで説得する方法、控訴の決意をし、現在東京高裁で精力的に闘っています。

行為によるセクシユアル・ハラスメントは多くの場合、密室で行われます。Aさんが勝訴するためにはセクハラの実害が立証されなければならない。しかもその立証責任が原告に求められるのです。さらにAさんの受けた行為が彼女を心から傷つけ、仕事を奪うような「加害行為」であったことも立証しなければなりません。

性暴力からの生存者として、性暴力の被害者を「サバイバー」と呼ぶようになりました。それは、自分のつらい性暴力体験を乗り越えて生き抜こうとする勇氣に対して敬意を込めることです。

横浜のAさん、九二年に勝訴となった福岡のAさん、実名で裁判に臨んだ宇都宮の菊地さん、八王子のAさん、障害者のAさんなど、たくさんのAさんたちは深く傷つきながらも勇氣をだして立ち上がった素晴らしいサバイバーたちです。

◆お知らせ

次回は七月二日(火)午後三時

第六回口頭弁論 東京高等裁判所 八〇九号法廷

ぜひ、みなさん、傍聴にいらしてください。

問い合わせ △横浜セクシユアル・ハラスメント裁判を支える会V事務局 TEL ○四五―六六四―三四九四

支える会ニュース『クラブA』有料頒布 カンパ歓迎です。

映画『地域をつむぐ』のフィルム貸し出し始まる

本誌二一六号「試写室」で紹介した『地域をつむぐ』の公開特別試写会が、五月七日―十二日、俳優座劇場(東京)で開かれました。連日、立ち見客が出るほどの大盛況で(通路にエア・マットを敷きつめて客席代わりにしたのは、時枝俊江監督のアイデアとか)、地域・医療・保健・福祉に関心を寄せる人の多さを物語る結果となりました。

*

同映画は非劇場上映を原則としていますが、先日フィルム貸出要領が決定しました。

あなたも映画上映を通じて、山村の診療所が全国の地域を担う人々へおくる問いかけ、地域医療・地域社会がかかえる数々の課題を考えるための呼びかけを、さまざまな地域で受

け止めてみませんか。

①主催者は、地域関係団体（または個人）②フィルム貸出料（16ミリフィルム）は一回上映・十二万円、二回上映・十九万円、三回上映二十四万円（以上、消費税は含まず）③二回以上の上映は、二日を限度とする④貸出料等は、上映終了後一週間以内に支払う——などが主な規定ですが、詳細は左記へお問い合わせください。

◆申し込み・問い合わせ

「地域をつむぐ」製作実行委員会（岩波映画全国上映推進委員会内）

〒一三三 東京都文京区本郷三一四—三

TEL ○三—五六八九—二六〇一 FAX ○三—五六

八九—二六八五 事務局・永井美也子

病院ボランティアの会が『地域をつむぐ』上映会

フィルム貸出システムによる上映会が開かれます。特別試写会に行けなかった方、関心のある方は左記へお申し込みください。

◆日時 六月二十九日（土） 十時～十五時半

◆会場 東京都社会福祉総合センター五階 講習・講座室（新宿区神楽河岸一—セントラルプラザ、J・R・地下鉄飯田橋駅下車）

◆主催 関東地区病院ボランティアの会

◆プログラム 十時 受付、十時半 総会、十一時半 軽食・

懇親、十二時四十五分 映画上映、十五時 時枝監督と懇談、十五時半 相談会

◆申し込み（ハガキかFAXで）

荒野綾子 〒一四二 東京都品川区平塚二—四—四—三二

四 FAX ○三—三七八四—七—二二

◆軽食準備などの関係上、お申し込みは六月二十五日必着でお願いします。

今、水俣病をかんがえる PART II

五月二十三日、「水俣・東京展」実行委員会の事務局を訪ねた。前号本欄に掲載した同展（九月二十八日～十月十三日・品川駅J・R車両庫跡地）の詳細をうかがうためだったが、昨年暮れに政府が打ち出した「水俣病の最終的・全面的解決

策」、そして取材前日（五月二十二日）の主要患者五団体の訴訟和解を、実行委員会が同展とどのように関連づけているか知りたかったからだ。

*

実行委員会は、九四年五月に社会字の日高六郎さん、作家の澤地久枝さんらが呼びかけ人となって設立された。現在事務局には四名のスタッフが専従、常時三名前後のボランティアスタッフとともに展覧会の準備をすすめている。

秋の「水俣・東京展」会場では、実行委員会評議員の一人である記録映画監督・土本典昭さんが収集した認定患者約五百人の遺影展示、特設ホールでのテーマ別・シンポジウムや映画上映、患者による闘病・闘争体験を語る講演会などが予定されており、「水俣病」を多様な角度から立体的にとらえ直すことができる。「まだ、交渉中」（実川悠太・実行委事務局長）だが、熊本大に保存されている患者の脳の標本や、有機水銀（猛毒！）を含むヘドロの展示も計画されている。

実川さんは「高校生の時、水俣病患者の方々が東京で一年以上も座り込みをしたんです。それ以来、水俣の人たちのお手伝いをしてきました。今年は水俣病公式確認四十年ですが、患者の平均が六十五歳を超えらるといわれる今が最後かもしれ

ないという思いがあります」「今回の和解については、「悲しい」のひとつです。患者さんがどんなにつらい思いで和解にいたったか。今までどんなにはねつけられ、ニセ患者と呼ばれつづける度に、あきらめ、くじけそうになったか。だからこそ和解の文面ではどうなっていようと、水俣病って本当はこういうものだ」ということを多くの人に知ってほしい」と、語る。

多感な青春時代に、国や企業の大罪を目の当たりにした実川さん。「私たちは患者さんに支援されてきた」という言葉に「水俣・東京展」成功への執念を感じた。

*

「水俣病と薬害エイズの酷似」を訴える人が多い。なるほど、国家と企業の「生命を軽んじる」態度が引き起こした悲劇に共通点が多い。何十年たつても変わらない「構造」。「水俣病の最終解決」とマスコミは言うが、本当に「解決」したのか。官僚・政治家・企業人の個々の顔があいまいなままでは、真実はいつまでも闇の中だ。

まずは知ること、あるいは「知りたい」と思ふこと。「水俣病とは何か」を同展で知り、触れることから始めるのが「権力の集中地」東京に住みつづけてきた個人としての「責任」

に思えた一日だった。

(右)

「水俣・東京展」、会員・スタッフ募集中

実行委員会では会員・ボランティアスタッフ、活動支援のための資金提供を募集しています。会員、ユース会員、賛助会員などさまざまなかたちでの参加が可能です、隔月発行のユースやイベント案内が送付されます。

◆問い合わせ 「水俣・東京展」実行委員会

〒一五〇 渋谷区渋谷二一九一七 グローリア渋谷初

穂・足立ビル一〇〇一

TEL 〇三ー五四八五ー六一〇七

FAX 〇三ー五四八五ー六六三九

「毒ガス展」九月から全国で巡回展

今年一月二十八日、「七三二部隊展」を開催した実行委員会の有志を中心に「毒ガス展実行委員会」が結成されました。

この「毒ガス」は、中国への侵略戦争で日本軍が使用した毒ガス兵器のことです。日本軍は国際法に違反して、二千回

以上にわたり毒ガス兵器を使用し、中国側は九万人を超える死傷者を出しました。そしてさらに日本軍は推定二百万発の毒ガス弾などを中国各地に棄てて引き上げました。

戦後五十年を過ぎても、これらの毒ガス兵器は未処理のままにされ、毒ガス弾と知らない住民がいたる所でたいへんな被害を受けています。三千人にも上る被害者の多くが現在も後遺症に苦しみ、自殺や一家離散という悲劇も起きています。また、地中で腐食した毒ガス弾から漏れ出る毒ガスが環境汚染を招くなど、日本軍の残虐行為の傷あとは今も絶えることはありません。

この問題は九二年二月、中国政府が国連のジュネーブ軍縮会議で指摘し、はじめて表面化しました。それまで沈黙し続けていた日本政府もやっと遺棄毒ガス兵器の処理に向け現地調査を始めましたが、その被害者への補償、医療援助などについては一切検討していません。

松本・地下鉄サリン事件で毒ガスの恐怖を目の当たりにして、毒ガス兵器の恐ろしさに対する関心は高まっています。実行委員会は九月から「毒ガス展」を「七三二部隊展」と同じく全国巡回形式で開催します。中国側や広島県大久野島「毒ガス資料館」の協力も得て、実物の毒ガス製造装置や日本軍

文書、パネル、写真などを展示し、この問題を広く伝えていく計画です。

〈東京会場〉

会期 九月十日（火）～十六日（月）

会場 新宿区立区民ギャラリー

新宿区西新宿二二一四 新宿中央公園内

TEL 〇三―三三三八―六二七七

〈広島会場〉

会期 十二月十七日（火）～二十三日（月）

会場 広島県民文化センター

広島市中区大手町一―五―三

TEL 〇八―二二四五―二三二一

〈シンポジウム（具体的内容は未定）〉

八月三十日（金）～九月一日（日）

会場 広島県大久野島国民休暇村

◆あなたの町でも「毒ガス展」を開催してみませんか

中央の実行委員会では、全国各地で自主的に作られた実行委員会に展示物を貸し出し、開催のサポートをします。ぜひ、

あなたの町でも実行委員会を作ってみませんか。

◆問い合わせ 中央実行委員会

〒二二七七 千葉県柏市つくしが丘五―一―四 梅 靖三芳

TEL&FAX 〇四七―一七三―〇二八四

埼玉発市民手作りのメディア

『市民じゃくなる』

四月に〈埼玉世界女性みらい会議〉の〈あごろ〉のワークショップ（あごろ二一八号参照）に参加いたしました、『市民じゃくなる』副編集長の土井裕之です。

さて、『週刊金曜日』という週刊誌をご存じでしょうか。この週刊誌は、広告に依存し大切な事実を報道しなくなったマスコミの現状を憂い作られた雑誌で、まだできて三年くらいです。この雑誌の読者の会が浦和市内で月に一回開かれています。社会問題などをテーマに井戸端会議をしています。

この参加者が中心になって『市民じゃくなる』をやることになり、昨年二月に準備第一号を発行しました。準備二号を経て、六月に創刊号を発行して以来、毎月発行を続け現在まで十二号を発行しています。A4判で十六ページ、埼玉県内の市民の活動や運動などを主に取り上げ、社会問題を総合的

に伝え、理念として「平和・人権・自治と共生をめざす草の根ジャーナリズム」を掲げています。「草の根ジャーナリズム」というのを、ただ客観的な視点に立つだけでなく、自分が活動や運動に実際に関わりながら情報を伝えていく、というふうにスタッフの間では解釈しています。

スタッフはだいたい五十人代（ほとんど二十代、完全にボランティア）、皆エネルギーです。なにせ発行日の直前は皆「テツヤ」生活ですからね。脳内麻薬が分泌されもうろうとするまで頑張っております。みな仕事や学校が終わってから事務局に来るので、作業がどうしても午前零時を過ぎてしまふ。ここから最終ページの編集部身辺雑記のコラム欄を「午前零時」としたんです。評判のいい連載は「手塚治虫と宮崎駿」や「不登校生活」。表紙下段のコラム欄を秩父事件の「困民党」とし、社会問題を硬派に切ります。一番のウリは、最終ページの主に埼玉の市民運動の集会日などを載せた「掲示板」と日本で最先端を行く、と言い切ってしまうほど内容の濃い「情報公開ニュース」です。

まだまだ未知の可能性を秘めた「市民じゃーなる」。埼玉県内の人にも県外の人にも、ぜひご講読ください。さらにスタッフも募集中です。夜中にもうろうとしませんか。

◆問い合わせ 〈市民じゃーなる社〉

〒三三六 浦和市北浦和三三七―三二二〇三

TEL 〇四八―八三四―二二三二

FAX 〇四八―八三三―六八六一

年間講読料 三千円（毎月十日発行）

郵便振替 〇〇一五〇一二―一四四七〇七

平和、人権、自治と共生をめざす草の根ジャーナリズム

市民じゃーなる



変えよう均等法！ リレートーク

五月十七日（金）十時から十三時、労働省前で「私たちの声を労働省へ！」リレートークが〈変えよう均等法ネットワーク〉主催で行なわれました。均等法施行から十年、しかし採用差別・コース別人事・パート雇用の拡大など、実質的な女性差別は増えている現状を、パート労働者・総合職・大学生など約三十人が次々にマイクを握って訴えました。

労働省との直接交渉には十人しか入れませんでした、その中の一人、賃金差別裁判の原告・野崎光枝さんに原稿をいただきました。

*

十時に始まったリレートークの間を縫って労働省交渉に入った。「均等法は女性の職域の拡大、定年制などでは一定の効

果があった。また、社会的に法の趣旨がひろがり、意識も高まってきた」というのが労働省の十年目の評価のようだ。しかし、最近ホットラインで二大企業の社員から「結婚退職を迫られている」「産休明けで出社したら全く仕事をさせてもらえない」という訴えを聞いたばかりの私としては、この乖離をどう考えたらいいか……。

また、均等法を意識したからこそ企業は間接差別へと走り、女たちは苛立ちをつのらせている、というのが現実ではないだろうか。労働省も今一歩踏み込んで「男女差別は経済効率から見て割に合わない」という企業文化を作ってくれることを願うのみである。

窓の外ではトークの声が続いている。交渉を終えて外へ出てまだまだ続き、司会は「短くね」と気を使っていた。何となく励まされた思い。少しでも現状を理解してもらうには、愚直に訴え続け、世論を喚起するしかないのかもしれない。

私たちにはまだ請願署名の仕事が待っている。また、この波を消さないためにも、次の一手を考えなければならない。

*

◆〈変えよう均等法ネットワーク〉では、冊子『均等法改正

に向けて わたしの一言」(二冊五百円)を発行しました。全国各地から、合計一五三人の切実な一言が詰まっています。

また、巻末には「均等法改正要求骨子」が掲載されています。

◆問い合わせ

〒一七〇 豊島区駒込三二一三一四一―二〇二 野崎方

TEL&FAX 〇三―三九四〇―三八九二

または〈働く婦人の弁護団〉

TEL 〇三―三二五―一四四七八

民法改正! 法務省頑張れ! リレートーク

五月三十一日(金)午前十時半から十三時、「民法改正応援団 法務省前リレートーク」が行なわれました。主催は〈すすめよう! 選択的夫婦別姓ネットワーク〉。

五月二十一日にマスコミで「民法改正案の今国会上程が断念された」との報道がなされましたが、自民党法務委員会ではまだ「上程しない」との結論が出されたわけではありません(五月三十一日現在)。ここであきらめずにもう一頑張りしようよ 法務省! という思いを抱いて、シングルマザー、婚外

子裁判の原告、海外の別姓事情に詳しい人など三十人以上の人がマイクを握って訴えました。

午後からは国会議員会館に赴き、ネットワークが制作した小冊子「選択的夫婦別姓は日本社会を豊かにきりひらく」今こそ民法改正の実現を」を全国会議員に配布しました。

◆問い合わせ

〒一〇一 千代田区神田錦町一丁目一六

大手町共同法律事務所 福島瑞穂弁護士

TEL 〇三―三二九―一〇八〇九

イスタンブールとその後を見つめて

HABITAT II 日本NGOフォーラム
出発準備集会

前号でもお知らせした「第二回国連人間居住会議(HABITAT II)」がトルコのイスタンブールで始まりました。政府間会議は六月三日―十四日、並行してNGOフォーラムが五月三十一日―十四日に行われます。

これに先立ち、五月二十七日午後六時半から東京YMCA

で約八十名が参加し、日本NGOフォーラム出陣準備集會が行なわれました。

準備集會は世界ハビタット議員連盟会長で今回政府代表团に加わった中西珠子さんの挨拶にはじまり、HABITAT II日本NGOフォーラム代表の秦辰也さん（曹洞宗国際ボランティア会事務局長）が今までの経過を基調報告しました。

秦さんは「日本NGOフォーラム」の活動のポイントとして、NGOレポートの作成、HABITATアジェンダへの取り組みなどを紹介しました。

NGOレポートと宣言文は、日本政府の『ナショナルレポート』が日本に存在する居住問題の実態と住民の声を反映していないことへの批判として作成されました。その内容は、第一部が「人間居住問題の現状と国際協力」。日本における人間居住問題の現状として、日本の住宅土地問題の現状（住専問題含む）高齡者と障害者の居住問題、ジェンダーと居住権寄せ場と野宿労働者（ホームレス）の居住権、在日外国人の居住問題、被差別部落の居住・環境改善の取り組み、沖縄の米軍基地と県民の居住環境と、多岐に渡る問題が報告されています。また、居住と国際協力という点からは、ODAと居

住権、NGO/CBOによる居住問題への協力が報告されています。第二部「阪神・淡路大震災と居住の権利」では、第一章「大震災は大人災だった」という表題に象徴される神戸の実態が生々しく報告され、豊かな日本の貧しい居住政策の実態が明らかにされています。日本政府はNGOレポートを追加文書として国連に再提出しました。

各立場からの発言は、政府関係者からは外務省総合政策局の古屋参事官、地方自治体関係者からは東京都国際都市機関連当の小沢副参事、国会議員からは遅れてかけつけた堂本暁子参議院議員。NGO側からは前出の秦さん、日本国際連合学生連盟HABITAT II準備委員会代表の森岡洋一郎さん、フロアからは障害者、在日韓国人などの代表と共に、へあごらの斎藤千代さんも沖縄について発言しました。

小沢副参事の「東京都独自の参加として、HABITAT IIが選択する『ベスト・プラクティス（最良事例集）』の中から、最も優れた三例に「東京賞」を授与する予定」という発言に対して、NGOレポートの「ホームレスの居住権」の執筆担当者から「東京都は人の頭を踏みつけていながら、賞を出そうとしている。都の行政に期待をすることはほとんど無

理だとなかった」と強い批判の意見が出ました。小沢副参事は苦しい表情で「地方自治体はいろいろな矛盾を含んでいる。どれだけのことが行政にできるかはわからないが、開かれた場所です話し合えるようにしたい」と話していました。

この集会在単なる壮行会ではなく、鋭い問題提起の場所となり得たことは、NGOにとっても行政にとっても、本会議へ向けて有意義だったと思います。(菅澤礼子)

被災地の声を世界へ届けよう！

神戸フォーラム

五月二十五日(土)、神戸でもHABITAT II 日本NGOフォーラム出発準備集会として「世界へ届けよう被災地の声を！ 神戸フォーラム」が行なわれた。

集会には、NGO関係者や市民約四十人が参加。「HABITAT II 日本NGOレポート」の概要説明に続いて、神戸レポートの編集者からその内容と意義等が紹介された。会場からの質疑応答の中でも「震災前からあった問題が震災で一気に噴き出た」という共通認識のもと、基本的人権としての居住権が無視され、コミュニティが壊されている被災地の

現状を世界に訴え、日本政府の震災対策政策の見直しを促す一端になって欲しいこと、他国の事例を持ち帰り今後の被災地復興への新たな手がかりを得たいなどの期待と抱負が述べられた。

反面、短い時間に英文をつけてまとめ上げたため多くの意見の集約となり得ず、「内容が手ぬるい」との指摘もあったが、現地で政府との情報交換の場を持つなど積極的に働きかけ、日本政府スピーチに被災地の意見が織り込まれるよう努力することになった。

なお、帰国後報告会を開くことが予定されている。

(阪神大震災被災地元NGO救援連絡会議 細川裕子)

HABITAT II 日本NGOフォーラムに関する問い合わせ

〈東京〉 HABITAT II 日本NGOフォーラム事務局

SVA (曹洞宗国際ボランティア会) 気付

TEL 〇三―三九四五一〇九八―

FAX 〇三―三九四二―七九〇〇

〈神戸〉 阪神大震災被災地元NGO救援連絡会議 (細川)

TEL 〇七八―五七八―六九二二

FAX 〇七八―五七八―六九二三

三万四千人の署名運動

伊良部裕子さんをお招きして

「沖縄を考えるつどい」を、私たちは何回か積み重ねてきましたが、四月二十六日、〈あごら沖縄〉の伊良部さんが上京なさるということで、東京ウイメンズプラザで小さな集まりを持ちました。

伊良部さんは沖縄県自治労本部女性部長で〈連合沖縄〉の女性委員長でもいらっしゃいます。「あごら」の沖縄特集号（一七七号、二二二号、二二七号）にも、原稿をお寄せ下さいました。今回の会は急な呼びかけでしたので、参加者は少なかったのですが、その分、ひざつきあわせて、内々のお話を伺うことができました。

*

斎藤 現在、連合は社民党にべったりで、私たちの思いと反対の方向に走っていますが、沖縄の連合だけは全島一致で、島民の心を県に届ける推進力になっています。

私たちはとにかく何かやらねばということ、署名活動を始めましたが、連合沖縄も県民署名に力を入れ、県を動かす力になりました。そのお話を伺いたいと思います。伊良部 『あごら』は十五年くらい前、友達がたまたま見つけてきて、その内容に打たれて会員になりましたが、なかなか自分では文章力がなくて、ただ読むことだけで参加してきたのです。三年前に那覇市職労の禁煙運動のことを書かせていただいた時も、あまり考えずに実際にやったことだけをただ羅列したという状態でした。

十一月二十日でしたか、クリントンが来るというとき、連合沖縄では座り込みをやる前から決めていたのです。その時たまたま『あごら』二二二号が完成して千冊送っていただいて、ちょうど高里鈴代さんたちの〈行動する女たちの会〉も座り込みをやっていて、彼女たちが一生懸命売っていました。そのあと私も三百冊ぐらい譲り受けて、本屋に置いてもらったり個人的に売ったりしたのです。沖縄のことを知ってもらいたくて、〈あごら〉の会員としてやったつもりです。高里さんも〈あごら〉の会員ですし、私も那覇市役所の職員ですから、彼女が非常勤で婦人相談員と

して働いていた頃から知っていて、よくおしゃべりしていたのですが、〈基地・軍隊を許さない行動する女たちの会〉とか、〈NGO北京実行委員会〉では一緒に行動していませんでした。私は私で自分の組織がありましたから。〈行動する女たちの会〉のほうが即戦力というか、その場で問題提起して行動して「凄いなあ」と思っただけにやりました。たのめすが、自分たちの組織を動かすのが私の役目でしたので。

組織は、会議を持って決定していくややこしいところがあり、自治労の県本部の執行委員では女性は一入でしたし、男性に知ってもらうことも私の役割かなという思いで、まじろっこしいんですが組織の中でやってきたのです。

私自身も歯がゆいし、周りからも「自治労の女性部は人権問題への取り組みが弱いんじゃないか」と見た人も多かったのです。

基地の問題は一挙に解決できるものではない。「これからだ、これからだ」と粘り強くやるのが大事、と自分に言い聞かせてきたつもりです。

連合沖縄執行委員会で

「住民投票条例」制定の要求を決定

今年一月、連合沖縄は沖縄県の米軍基地の存在に対し、住民の意思を明確に示そうと、沖縄県へ住民投票を求める条例を制定するよう、請求することを決定しました。これには、四月にクリントン大統領が来日することがほぼ確実になったことから、この際クリントンに沖縄県民の思いを伝えたいとの目的がありました。

民主主義を標榜する米国にとって、住民の直接の声は最も心に響くのではないかとの思いから出されたものです。

その内容は、昨年十月二十一日の県民集会で決議された四つの項目の内、「日米地位協定の見直し」と「基地の整理縮小」に対し、県民の是非を問うというものです。

連合沖縄は、昨年九月から取り組んだ「米兵による少女暴行事件に対する抗議と日米地位協定の見直し等を要求する署名」が百万名を突破したことから、もう一度県民の思いを明らかにし、日米両政府への強烈なインパクトを与えることも、その狙いの一つでした。

日本国憲法九五条には「一の地方公共団体のみに適用される特別法は、法律の定めるところにより、その過半数の同意を得なければ国会はこれを制定することができない」と定められています。沖縄が本土復帰した際、米軍用地などの賃貸契約拒否地主に適用するために特別立法された「公用地暫定使用法」は、住民投票がないまま制定されました（その当時は沖縄には憲法は適用されていません）。県民生活と密接にかかわることでありながら、米軍基地の存続をめぐる住民の意思を問うことなく五十年もきていることに對し、今こそその思いを確認する必要があるのではとの強い思いで、今回の条例制定要請は決定されました。私自身はこの決定に大賛成でしたが、もし投票率が悪かったり、過半数が基地の整理縮小に反対だったら、どうしようという不安もないわけではありませんでした。

三月一日、署名運動開始

連合沖縄は約四万八千人で構成され、各構成組織には縦系列ですべて下りていきます。

三月中には署名を集めるなど、条例制定を県知事に要請するまでには、さまざまな手続きが必要です。県レベルでの住民投票は全国初ということで、ともかく皆が素人で、暗中模索、大変な困惑と混乱の中で手続きが行われていきました。私は直接この作業にタッチしたわけではありませんが、自治労の県本部にいて、この混乱ぶりがよく伝わってきました。手続き条件としては、次のようなことがありました。これは地方自治法第七四条「条例の制定・改廃の請求」に基づくもので、

- ・有権者の五十分の一以上の署名が必要
 - ・署名活動の前提には請求代表者証明書交付申請をしなければならぬ
 - ・投票資格者は県内の有資格者に限る
 - ・二か月以内に集めなければならない
 - ・必ず自署、生年月日、住所を記入しなければいけない
 - ・署名用紙（一枚六名記入できる）は連記でなければならぬ
- など、いろいろな条件があるのです。

三月から署名を始めるというので、私は春闘の時期、職

場オルグでこの件を話しましたが、賃金や労働条件などの話題の時は知らんぷりの人も、話がこの件に及ぶと、顔をこちらに向けるかあるいは耳をそばだてて聞いてくれているのが、はつきりわかりました。

また、街頭にも立ちましたが、反応はすいぶん良かったです。他府県の方々なのに「自分も署名したいよー」と叫んで帰る方もいたりで、かわわる人がすべて初体験であるなか、関心度はかなり高かったと思います。

連合の各構成組織、街頭署名、また近隣・親戚などからの署名と次々に届けられますが、この集約が大変です。せっかく署名していても、六名連署の用紙に一人でも欠けていたら使用不可とか、もうもう問題をかかえ、補正、追加などをしながら、なんとか一万八千名を越す署名が集まりました。

ボツになるものも多いので、多めに提出しなければなりません。

四月中旬に各市町村の選管に提出し、選挙人名簿との照合(審査)してもらい、ようやく県知事へ提出できることになるのです。

大田知事を突き上げた市民運動

大田さんのことですが、五年前に知事になって、翌年、公告縦覧というのがあったのです。代理署名の次にくる事務手続きなんです。四年前の時は、その前の知事が代理署名をしてしまったのです。それで公告縦覧をしないでくれということ、大田知事の支持団体が要請し、集会なども行いました。

しかし、もし拒否したら沖縄県民に不利益になるのではないかということもあって、また、当時は西銘知事、つまり保守県政から革新県政へと移ったところなので、周りの人の協力を得るのが難しく、知事自身はやりたくなかったと思うのですが、県民のために多少国に追隨したほうがいいのでは、と妥協したのだと思います。

そのとき私たちは、なぜこの知事を選んだのかと失望しました。大田さんが当選したときに、沖縄の人がもつと基地撤去や安保廃棄の問題を真剣に議論すべきだったのです。ところがあそこで「この人でさえもできないのか」と失望

して、「基地と共生共存もやむを得ないか」と考えた人も多かったと思います。

今回の代理署名も、反戦地主とか一坪反戦地主とか、厳しい闘いをしているところは「署名しないでくれ」とずっと言い続けてきたんですが、知事ははっきりした態度を決めていなかったんです。八月二十一日に防衛施設庁から代理署名の要請があり、揺れ動いていたのです。

その後九月四日に事件があつて、女性たちがまず最初に立ち上がり、それから県当局や教育関係者も声を上げ、その他の団体も米国総領事館に抗議に行ったり決議をしたりしていったのです。

知事は外務省に「こんな事件が起き、犯人はまだ日本の警察に捕まっていないので、早く身柄を拘束させてほしい」と言いに行ったのですが、全くなしのつぶてでした。そういう態度を見て、知事としては感情的にも許せなかったようです。

その後二十八日に沖縄県議会で拒否することを表明し、そこで決断してくれたということで、女性の人権問題から発した基地撤去の大きなうねりが、今度は代理署名拒否で

わーっと広がったのです。そして十月二十一日の十万人(宮古・八重山を含む)集会になっていったのです。

大田知事は普天間基地の近くに住んでいるのですが、知事自身も飛行機の騒音とか危険を身をもって感じていただろうと思うのです。それで普天間を返してほしいと主張してきました。新聞の切り抜きをみますと、四月十二日夕刊には「返還は難しい」と書いてあるのです。ところがその日の夕方六時には、返還を発表しています。全面返還は絶対ないとさんざん言われた普天間基地ですが(三月三十日に筑紫哲也さんが来沖してシンポジウムがあつたとき、それに副知事が出席して「移設であれば返還が可能である」とひとこと言っていたので、その頃からもうわかっていたのかもしれませんが)、ともかく公には十一日の六時まで「不可能」と言っていたのが、突然返還の発表になった。それに対して知事が国の関係省庁の大臣に感謝していますね。完璧な形で返還であれば感謝してもいいと思うのですが、結局この機能を嘉手納基地に移して、ヘリコプターの特長なもの(RC-130航空機)を岩国基地に移し、同数のハリアー航空機を米国へ移駐するという形になりました。

嘉手納は大きいから、ヘリコプターが飛んでも周りに影響がないと解釈されたのかなと思います。今でも爆音訴訟を起していますね。そこに更にまた移動させるということでは、では嘉手納に住む人はどうしたらいいの？ と、住んでいる人はやりきれないと思うのです。

国に対して「感謝する」という言葉を使ったことで、大田さんもうするかということですが、心配なところです。斎藤 少女の事件は普天間の近くであった、それで普天間が選ばれたという推測もありましたが。

伊良部 違います。私は知っていますが、沖縄島という小さな島なので、場所の特定はしない方がいいと思います。ただその後また、強かん事件が起きているのですが、本人が報告しなかったので、騒ぎが大きくなかったのです。九月四日の事件は被害者がたまたま子どもだったということで「少女には非がなかった」と全国的に応援が来たと思っています。私はそこが男の人の女性に対する見方の違いだと思います。これが大人の女性だったらどうだったかと、女性同士で話しています。

斎藤 それにしてもあの少女はえらい。その家族もえらい

と思います。公判の告訴状を読んで、私は言葉を失ってしまいました。あまりにも残酷で。その残酷な状況が告訴したことによって全部知れ渡ったわけです。それだけの犠牲に対して抜本的な対策が講じられなかったら、私たちは自分を恥じなければならないと思います。

目玉商品にされた普天間返還

伊良部 今の副知事は女性が一人と、もう一人が自治出身の吉元政矩さんで、その力も大きいと思います。大田さんを推した選挙母体、革新統一ということでは全県的に推しましたから。その辺の支えも大きかったと思います。

今回のように、移設を条件とする返還はほかにもあります。いわゆる三事案と言われているもので、那覇軍港や、毎月三日間実弾演習の行われている「県道一〇四号線越え演習」、読谷村のヘリコプター降下訓練場などもずっと前に返還が決定しているながら、いまだに実現しないのです。だから普天間の返還も私は信じられません。

ただこれだけ大きく打ち上げたのだから、これは絶対に

やらないわけにはいかないと思うのですが、移設するところが反対しているのですから、どうなるのでしょうか。大田さんは、それとこれとは違う問題だと言っています。まず一番危険なところから返してもらおう。だが、移設に関しては県の問題ではない。国が責任を持ってやってくれと言っているんですね。

斎藤 それにしても、返還は十年後だと言っているのですよ。即時返還ではないんですね。橋本首相は「普天間を返させた」とアドバルーンを打ち上げて国民を喜ばせ、内閣支持率を急上昇させた。しかし、普天間の何十倍、何百倍の見返りが、アメリカに約束されていたんですね。この機会に私たちが、少女に倣って捨て身でやらない限り、日本は実質的にアメリカの植民地として固定化しますね。

思いやり予算があるかぎり

米国は基地を返さない

伊良部 フィリピンの基地が撤去されましたが、フィリピンで基地を借りるには、賃貸料を払わなければ貸してもらえないという状況でしょう。日本では思いやり予算とかで

全部出すわけですから、アメリカにとってこんなに良い場所はないと言われています。六千億円、住専と同じくらいの税金を、毎年米軍基地のために使っているのに、それについて全然論議されていないですね。最初の一九七七年から何十倍にも膨れ上がっているのです。

斎藤 思いやり予算なんて、ヤマトの人間はほとんど知らないんですよ。私も沖縄に行って「あの施設もこの宿舎も思いやり予算!」と沖縄の人たちが怒るのを見て、初めて実感できたのです。

本来沖縄は貿易港として栄えていたわけです。シンガポールからも韓国からも近い、アジアの中心地です。貿易立国でやっていきますよね。基地に依存しなくても。

今は基地太りで、年収が何億という人もいるという話も聞きました。

伊良部 軍用地主の中に年収が億になる人がいるかどうか私は知りませんが、基地が一挙に返ってくるとなると、それで食べている人は死活問題になるという現実がありますね。特に、年老いた人には深刻です。

地主たちは、労働運動の人たちが基地返還を要求しても

「返ってくるはずはない」と思っているのも何も言わなかったのですが、今の運動を見て、「あるいは返ってくるかもしれない」と皆感じたと思うのです。だから10・21の県民集会には地主連の人たちは、組織としては参加しないと決めたのです。

その後、県が国際都市形成ということで跡地利用の計画を立て始めたのですが、それに対して「こんな夢物語を」とか「現実性が乏しい」と県に申し入れをしたりしているのです。

県の「国際都市形成ビジョン」と「基地返還アクションプログラム」というのがあって、返還しながらどういうものを作っていくか、セットでプランを作りつつあるのです。今までこんなことは考えなかったと思います。返還されるということと自分が考えられなかったのです。そういうところが「返還してもらおう」という運動が弱かった理由の一つだと思うのです。

斎藤 米軍基地があることに反対する意見がなぜ新聞にもテレビにも出ないかというと、暗黙の抑圧を受けているのではないのでしょうか。放送局や新聞社にいる知人の話では、

少女暴行事件までいいけれど、安保に踏み込んだものはカットされると聞きました。

私は一九八五年のナイロビ世界女性会議のときに、フィリピンの女性たちと徹夜で話したのですが、「マルコスが悪いとはわかっていても排除できないのはUSの基地があるからです」と、涙を流していました。マルコスの背後にある基地を撤去しなければ、猛烈な運動をやっていたわけですね。日本で自民党があれだけ腐敗しながら続いているのは、どこかで誰かがサポートしているのでは？ と日本人は発想しないけど、その辺が日本人より賢いですね。フィリピンの人びとは、マルコスがいかに人気がないかという情報を送ったから、アメリカとしてもそういう政権をサポートしても仕方ないと思うようになったと、後にフィリピンの人に聞きました。

アメリカ政府とNGOに訴えた 沖縄の女たち

前島 へ基地・軍隊を許さない行動する女たちの会 がどんなことをしているか、教えてください。

沖縄から

伊良部 最初は、北京会議に参加するということで、沖縄から七十名あまりがチャーター便で北京へ行きました。一昨年の十二月くらいから北京会議に向けて月に一回集まって学習会をやったのです。〈あごろ〉北京会議シリーズを教科書にして。あと英語とか中国語とか、ワークショップのテーマとか。私は途中で降りたのですが、みんな熱心にやっていたのです。高里鈴代さんのグループは「軍隊と性暴力」、他の七十名全員もそれぞれワークショップをやりました。

少女暴行事件のあった九月四日は、北京会議でヒラリーさんが演説をしていたその日なんですね。五日に皆帰ってきたのです。高里さんは遅れて十日に帰ってきたんです。高里さんは行動力がありますから、皆帰りを待っていたのです。十日に飛行場に迎えに行つて、「こういうことがあった」と知らせたら、彼女はびっくりして、翌日北京会議のメンバーで声明を発表したのです。

胸が詰まってことばにならない彼女の声明の場面を、九時のニュースで見た人が感動を受け、「黙ってはいけな」と思ったのです。米国総領事館に抗議文を持っていっ

たりして、それがまたマスコミで流れたんです。

最初は〈NGO北京会議実行委員会〉という名称だったのですが、その後〈基地・軍隊を許さない行動する女たちの会〉という名称に変え、多くの賛同人を集めて行動するようになりました。署名運動や、カンパを集めたりしました。二月の初めには十三名が〈アメリカ・ピース・キャラバン〉でアメリカのいろいろな団体に訴えに行ったりしています。『あごろ』の売り上げ十万円をこのキャラバン出発の壮行会で高里団長に渡してあります。

斎藤 沖縄の方のお話は、ご自分の感じていることと行動に乖離がないので、どの方のお話も胸に響きますね。沖縄にも〈あごろ〉の会員はたくさんいますが、どの方をお呼びしても素晴らしい話が聞けます。沖縄が決して孤立しないように、ヤマトも一丸となって応援しましょう。

いま誰にでもできるのが、署名運動だと思います。〈あごろ〉も署名に取り組み始めましたので、皆さんにお送りした用紙を、どんどんコピーして送ってください。あの戦争で沖縄を盾としてヤマトの人間が生き残ったことを、決して忘れてはならないと思います。

〈追記〉

県知事へ県民投票条例を請求

——大きな波紋を広げた署名運動

連合沖縄の代表は五月九日、四十八市町村・三万四五〇一名の署名簿を添え「日米地位協定の見直し及び基地の整理縮小に関する県民投票条例」の制定の本請求を行いました。クリントン来日までには間に合いませんでしたが、県民の総意を集めた署名・本請求でした。

知事も受理しながら「連合沖縄の取り組みは県政の大きな支えになっている。早い時期に適切に対処したい」と述べました。

五月二十日、臨時県議会の中で大田知事は、連合沖縄が制定を要請した「日米地位協定の見直し及び基地の整理縮小に関する県民投票条例」案を提案しました。

知事は、この案に対する意見書を提出し、住民自治の充実から賛意を表明しました。連合沖縄の条例案を踏襲し、十七条からなる条例案と投票実施に伴う経費を計上した四億七千九百万円の補正予算等を提案しました。

六月二十一日頃には県議会でも可決され、投票日は九月一、八、十五日のいずれかになるとも言われています。

今、沖縄県会議員は選挙戦の最中。大田県政を支持する議員、つまり多数与党達成のため、最後のお願いの連呼が続いています。私も微力ながら運動に加わっているところです。
(六月五日)

「未来の子どもたちのため、

沖縄から核施設を

撤去して下ろす」

沖縄県浦添市在住の建築家、本村安彦さんから、このようなお便りをいただきました。

前略 橋本龍太郎内閣総理大臣殿

未来の子ども環境にとって、今のままの平和のあり方で良いのでしょうか。

参考までに沖縄の核施設について述べたいと思います。終戦から今日まで、本土で米軍基地を建設する際の予算は

沖縄から

すべて日本政府の国防予算でまかなわれたのは、ご承知のとおりと思われます。だから本土にはかつての沖縄に存在したメースB核ミサイル発射基地や、今問題の嘉手納や辺野古に現存する核弾頭貯蔵庫などといった具体的な核専用施設は、会計監査上からも建設できませんでした。

それに比べ、沖縄では二十七年間の米国統治のせいで核貯蔵庫など核専用施設がすべて、米国防予算で計画・設計・工事・維持・使用されております。問題は、沖縄の過重な基地負担を是正し、不平等をなくするために米軍基地の本土移設が不可欠にもかかわらず、本土復帰後二十四年経過した現在の沖縄で今もその核施設が存在・機能し、国是である非核三原則という日本の国策の関係上、本土移設が不可能となっています。それが明らかになっているにもかかわらず、本土並みに国防論を展開しようとするところにも無理があるのではないのでしょうか。

今一番問題になっている、日本国内で平時において民間空港や港湾施設を米国軍隊が使用する（今回の日米防衛協力のための指針・ガイドライン見直し）ということは、日本全国に核持ち込みを広げることになります。とすれば、

憲法や日米安全保障条約で「核兵器の持ち込みに関して日米の事前協議が必要」と明確にうたわれていても、昨年十月に報道された「米軍の日本国内への核兵器持ち込みに関しては、実は全く事前協議の必要はない」という趣旨のN CND（核兵器の存在を肯定も否定もしないというアメリカの核政策）に基づく日米首脳秘密合意文書の内容や、核疑惑を持たれている那覇空港、ベトナム戦争や湾岸戦争で核兵器が搭載されていたと見られる原子力潜水艦が寄港した那覇軍港などを持つオキナワの現状を見ると、現場の素直な感情として「少女事件を利用した日米両国政府は、人間としてあるまじき行為をしたことになる」としか言いようがありません。

どうか沖縄から核施設をすべて撤去させ、米軍と共同で維持・管理・機能しているであろう那覇空港の核施設全廃を含め、日本の非核政策遵守と厳守を実行してください。非核・反核を原点とした安全保障論を、絶対不戦の決意の下、日本全国公平に展開することを要請します。

*

本村さんは、沖縄から核施設を撤去させるために署名連

動を展開中。六月三日現在で約九千八百名集まっています。

署名のお問い合わせは

〒九〇一〇二二 浦添市宮城一三六〇七一一〇二二

「沖繩から核施設を撤去させよう」事務局 本村さんまで。

「沖繩からのメッセージ」全国各地で開催

「沖繩が見えますか？」五月二十七日、全国紙に一面広告で掲載された「沖繩からのメッセージ」をご覧になった方も多いと思います。

「沖繩からのメッセージ」基地と平和と文化を考える」

この催しは沖縄県の主催で、今年二月二日から十八日まで全国八都道府県で開催されました。県自らが沖縄の現状・歴史的経過・文化などについて日本全国に伝え、一緒に考えていこうというこの試みは大盛況で、会場に入らずロビー等に設置したモニターで参観する参加者も多数という状況でした。

内容は「映像で見る沖繩（約三十分）」「講演（講師は各地によって違う・約三十分）」「琉球舞踊（約六十分）」同時に



沖縄県

ご存じですか。

国土面積のわずか0.6%の沖縄県に在る日本軍専用施設面積の約75%が集中していること。

また、米軍用地の多くは、米軍の施設屋下にあった時期に強制ランドサーによって強制的に収められた土地であること。

さらに、復讐後昭和47年（1972年）にも、127件の航空機事故や、1700件以上の刑法犯罪など米軍基地から派生する事件・事故が数えられ、このほか航空機騒音や自然破壊等が発生していること。

このような、基地を取り巻く背景や現状を踏まえ、知事は、米軍用地の強制使用に係る代理署名を拒否しました。

復讐時に比べ米軍基地面積は、本土では約60%も減退しているにもかかわらず、沖縄県では約90%に達しています。

沖縄が見えますか？

基地返還後の跡地利用や沖縄の明日を考えるために、私たち沖縄県民は「基地返還アクションプログラム」の策定などの計画をまとめあげました。

平和で豊かな沖縄の地において、国内各地域やアジア諸国等的人物、情報が行き交い、平和・経済・文化・交流が行われる国際都市を形成していくためには、とりわけ米軍基地の返還は必要なのです。

そして米軍基地の返還跡地は国際交流拠点となる段階的に形成していく計画です。このために同じと調性を感じながら目に見えない形で基地問題を解決していきたいと県民は考えられています。

沖縄は、戦後50年間、長く基地に苦しんできました。

私たちは、今声をあげないと21世紀になっても、

この苦しみから逃れることはできないと考えています。

私たちは、自立を求め、そして若い男女も、男も女も、自然のあらゆる生態系も共に生きる。

世界の人々と心を開き、向かい合っています。

平和を築いていきたいと願っています。

沖縄から

写真パネル展も開催されました。

二回めは五月二十八日から六月九日まで、全国十県で開催されました。沖縄県総務部知事公室広報課によれば、今後また開催するかどうかは未定だそうです。キャンペーンの手応えは十分のようでした。

△二月の入場者数

二月二日（青森） 五百名 四日（札幌） 八百名
六日（東京） 七百名 七日（名古屋） 四百名
十二日（大阪） 千三百名 十三日（京都） 六百名
十五日（広島） 千百名 十八日（福岡） 千名

△二月のアンケート年代別比率

一七九六名中
十代三・五％、二十代二％、三十代一六・三％、
四十代二八・三％、五十代一七・八％、六十代一四・八
％、七十代以上六・五％

△二月の主な感想

◆基地問題

- ・沖縄の怒りが理解できた。
- ・沖縄の戦後の歴史について、沖縄の人たちの長い間の悲しみ、苦しみが良くわかった。

・自分の知らない基地問題がたくさんあると初めて知った。

◆文化

- ・沖縄独特の文化を肌で感じることができた。
- ・表現できないほど素晴らしい。
- ・沖縄に行ってみたくなった。

◆その他

・沖縄県の基地問題が全国のマスコミで取り上げられているこの時期に、行政が同事業を実施したことに対して、時宜を得たものだとの評価が多数あった。

・パンフレット・ビデオについては、平和学習の資料として活用したいということで、事業終了後も全国各地から提供の問い合わせが相次いでいる。

・パネルの貸出についても、県外から多数の問い合わせがある。

◆この件に関するお問い合わせは

〒九〇〇 沖縄県那覇市泉崎一―二―二

TEL ○九八―八六六―二〇二〇

FAX ○九八―八六六―二四六七

沖縄県総務部知事公室広報課へ。

被災者に公的補償を！

——いま、現地では——

被災地の経済生活、その実態

今、神戸では日常生活にもとりつつある中、経済的に行き詰まっている人びと、見通しが立たず、希望が持てない人びとが苦しい現実にあえいでいる。仮設住宅生活者の七〇％が年収三百万円以下。二百万円・百万円以下が合わせて四五％くらいとのことだ。

この人びとは仮設を一年後に出る時に行き場がないのだ。約四万世帯・九万人、そして仮設にも入れないで公園や他の所に住んでいる約四百人の人びと、半壊の家でも何とか住めるけど、修理する金額を用意できない人びと。

八十歳の男性は「一生懸命と質素を旨とし、左官業にて働き通し、家を建ててやれやれと思えば震災。一考願う。

このままではお先真っ暗」。六十五歳女性は「震災のあの時に助かって、本当に良かったのか。この頃考えてしまうこ

とが多くなった」。

これら全ての人びとの切実な想い。「あまりにも個人にまわる義援金が少なく、せめて生きる希望が必要」と、被災者の公的支援を求めて被災地を中心に署名活動を始めた。中心になっているのは、兵庫労連などで構成する〈阪神・淡路大震災救援復興兵庫県民会議（四十二団体）で、六月五日現在、署名は六十一万人を越えた。これは核兵器廃絶を訴える「ヒロシマ・ナガサキアピール」に匹敵する手ごたえと言える。当初は一か月一万人くらいのペースだったが、国家予算が個人補償支援に触れなかった昨年十一月以降、約九万六千人、「住専」につき込む金を被災地に、と住専国会が揺れた今年の四月以降は十万人の大白に乗り、今六一万二八〇一人に達している。

〈大震災救援復興県民会議〉代表委員の一人、宮崎定邦・元神戸弁護士会会長は「既成の政党や労働運動の枠を超え、賛同の輪が広がった。個人補償は少数意見ではなく、普遍的な政策テーマになった」と話している。

また、三月に約十二万人の署名を集めた〈連合兵庫〉は「いろんな団体が波状的に動いているが、最大公約数は個

人に対する公的支援だ」と話している（神戸新聞より）。

訴え続ける被災者たち

三月十九日大蔵省前。そして近くの日比谷公園で、阪神震災被災者の個人補償を訴えるために座り込みをした人びとがいた。〈神戸復興を考える市民の会〉そして神戸の上野泰昭さん（五十二歳）と仲間の三人。

東京のボランティアが延べ二百人も応援に駆けつけ、雪や雨の中約二週間座りつづけたが、結局同省からは「復興には努力している」という返事しかなかった。改めて来月要望をもつと具体化して再要求する、と神戸に帰っていった。

四月に入り、神戸の方が国会に要望書を提出に行くからと、私にサポートの依頼があった。昨年の参議院選挙の頃に、神戸から東京まで震災の報告をしながら歩いた方々のサポートをした縁で、今回も四月十九日から、神戸被災者救援を迫る〈阪神生活再建の会〉〈阪神被災者連絡会〉の方々の支援をさせて頂いた。

住専処理に税金が投入されることへの反発と怒りの中、罹災証明書を集め国会に提出することになり、約五万人世帯分の証明書がワゴン車に積まれて東京まで運ばれた。寄せられたコピーは、仮設住宅住民のものが過半数。仮設では今四万世帯の人びとが暮らし、生活再建に国の援助を求めている声が切実に高まっている。罹災証明書の余白には、いろいろな訴えが書き込まれていて、読んでいううちに涙があふれてきた。

「助けてください。死を考える毎日です。何か私が悪いことをしましたか？（女性八十四歳・芦屋）」「朝、パン一枚、コップに水を入れ食すだけ（男性六十四歳・神戸）」「六月に結婚式をと思っているが金もない（男性二十五歳・西宮）」など、胸の底からの訴え、救済を願う想いが、私にも苦しいほど伝わってくる。この罹災証明は十万世帯を目標とし、〈阪神生活再建の会〉は議員立法による被災者救済の法律化の実現をめざすために行動を始めている。これに対し、新進党（石井一氏、赤羽一喜氏、冬柴鐵三氏）新社会党（岡崎宏美氏）の地元出身議員が、党を超えて連帯して動き出そうと歩調を合わせ始めてくれている。神戸の被災

者、ボランティア、行政、市議員などの人びとが手を結んで一連になって動きだした時、そして沖繩のように県知事や市長が市民代表で国に対して活動を始める時は、日本中が支援を始めてゆくのではないのだろうか？ 現在兵庫県震災復興担当理事である辻寛氏も「被災地の実情を理解してもらいたいのは県も同じです」と励まして、東京へ送りだしてくれた。

東京へ訴えに行く

被災者からの具体的な要望として「緊急生活再建援助金の支給」全壊世帯五百万円、半壊二百五十万円、一部損壊五十万円、全・半壊世帯は金額上乘せ」を国会に求めている。生活再建資金の支給のほかに、減歩率の緩和、新たな融資制度の設立、雇用問題の解決などを要望している。阪神・淡路復興推進委員会（会長・石井一氏）は、五月五日神戸で現地調査会を開き、地元選出の国会議員七人と、代理人二名が出席。石井委員長は「支給対象をどう仕分けするかも難しい。仮設住民に限る」と提案したが、住民側は

「仮設以外にも」とした。石井氏は「個人補償は難しいが、今後でも取り組みを続ける」姿勢を見せていた。

公的支援を強く国に訴えるため、五月十三日夜、兵庫・大阪両府県の仮設住民二百五十人がバス五台に分乗し、東京・霞ヶ関に上京してきた。参加者のうち六〇%が六十五歳以上、最高齢は八十二歳の男性。医師四名、看護婦二名が同乗、旅費はカンパと借金でまかなった。「公的住宅の数でなく、今日・明日の生活をどうするのか、答えてほしい」と、老人たちは口々に話した。

国会議員たちと対話した結果は「東京に無理して来てもわかってもらえなかった」と、失望の色は隠せないようすだった。

六月二日、阪神生活再建の会が集会を開き、被災者と地元選出国會議員（与野党とも）政党的役員、秘書ら五十人が参加した。二百五十名が上京し、直訴した報告会と被災者同士の中での温度差が生じている上京の中の「弱者」の意味を考えたいとの提案があった。

参加者の中から「補償を受けるには、家族や知人の同意が必要という方法は？」個人補償はいらないと言っている

被災者もいるから……」など、意見が交わされ、六月中旬に再び会合を開き、意見を集約するということになった。

ボランティアとして、いま考えること

今年一月十七日の震災一周年を迎えるに当たり、ボランティアで神戸に関わってきた私は、立ち止まって考え込んでしまった。

被災者の人びとが生きていくのに夢中で、疲れ切っているため、考える力も時間もないことがよくわかっていたし、どうサポートしようか私も揺れていた。被災者自身が国に向かって自力で訴えてゆくエネルギーが出てくるまで待とう、私なりに、講演とか原稿で、自分の感性で受け止めた現地の事実をしつかり伝えてゆこうと。

沖繩のように、市民レベルが動きだし、市長や県知事が動きださなくてはならないようなうねりが、活力のある若い世代からわき上がってくることを願わずにはいられない。二一世紀に次の子どもたちに引き渡せる、老人の住みやすい(弱者の生きやすい)緑多き、車優先ではない、自然も

人も「優先の街づくりのできる可能性が、いま日本で一番ある神戸なのだから。五十年、百年先の次の世代の人々が生きていく上で、何が一番大切なのか。経済なのか? 生命なのか? 生き方なのか?」じっくり時間をかけて被災者同士考えて頂きたい。大切な自分たちの子どもに受け継いでもらう神戸だからこそ、急いで違った方向に進んでほしくないのだ。

そんな想いの中で、国会に注目していた。六月の国会で残念だが公的補助は見送られてしまい、住専への支出が認められたことは、神戸の人びとへ国の目も向いていないことを確認できたということになる。

これからが神戸の人びとの正念場なのではないだろうか。神戸の人びとが本気で立ち上がるのをいつまでも見守り、祈る思いで待っている。立ち上がったその時は、私は全力でサポートしたい。

南駒栄公園のテントを、法律違反を覚悟で、日本人とベトナム人が掘って建て小屋に建て替えていったあの時のように……心の準備と体力の準備を整えて、これからも待っている。

(ボランティア 城内治美)

ニューヨークで

「阪神震災写真展」開催

日本以外の、外部からの日本に対する働きかけがこの際必要と考えた被災者が連帯し、アメリカ・ニューヨークのSOHOで震災写真展を開くことになりました。

今年六月にトルコのイスタンブールで開かれている「HABITAT II」での日本NGOフォーラム報告と並行して、米国ニューヨークでも阪神の現実（特に一年半経過しての住居問題は、他国にとって高度経済成長の日本では考えられないようですが）をアピールすることにより、市民レベルで外国からの精神的支援も考えてみたいと行動を始めています。米国住まいの友人がいらっしゃる方々、どうぞご協力の呼びかけをお願いします。もちろんカンパも大歓迎です。

スケジュール予定

七月十三日（土）～二十三日（火）SOHO

七月十三日（土）～八月一日（木）ブルックリン

◆問い合わせ デイリースポーツ社

情報開発部会事務局 局長 中島光一郎

TEL 〇六―四四七―一八二五（内線二七八）

『地震隠し検討資料シリーズ』

発行

今年一月、震災一周年に『神戸黒書——阪神大震災と神戸市政』を発行し、行政側の開発優先の復興計画に鋭い批判をつきつけた。市民が造る神戸市白書委員会。発行後委員会にはさまざまな反響が寄せられました。

委員会では、三月に『地震隠し検討資料シリーズ①』として『神戸と地震（一九七四年十一月、神戸市発行）』と『兵庫県下震災対策調査報告書（一九七九年度、兵庫県発行）』を一冊にまとめた復刻版を発行しました。

『神戸と地震』の執筆代表者は大阪市立大学の笠間太郎氏と京都大学の岸本兆万氏で、一九七四年十一月に、神戸市の総務局および土木局が刊行したものです。「まえがき」によると、この調査は神戸市当局より調査依頼を受けたもので、一九七二年、七三年の両年度に実施されたものとのこと。この報告書の四十八ページには「活断層の実在

するこの地域で、将来直下型の大地震が発生する可能性はあり、その時には断層付近でキ裂・変位がおこり、壊滅的な被害を受けることは間違いない」とはっきり結論づけられています。このことは七四年六月二十六日の神戸新聞夕刊に「神戸にも直下型地震の恐れ」という見出しで報道されています。しかし、その記事には「いまは心配ない／十万年単位の長期警告」という田中茂神戸大学工学部長（当時）のコメントがついており、その後フォローされています。『神戸黒書』では委員会によるその理由の「推測」を第二部二章に記述しています。

『神戸黒書』関連の新聞記事の中で伊川神戸市総務局庶務課長は「二十年前のことで報告書は残っておらず、直下型という表現があつたかどうかはわからない」とコメントしています。このコメントに疑問を抱いた「神戸と地震」の原本を所有していた方が、委員会に原本を届けて下さったそうです。

もう一つの報告書の正式な表題は、『兵庫県下震災対策調査報告書―兵庫県下における地震被害の潜在危険度』です。この報告書は神戸大学理学部の三東哲夫氏が執筆され、「過

去さしたる地震災害の経験もなく、また日頃地震を感じることも稀な兵庫県下の地域住民の地震に関する関心の低さは当然のこととは云え、憂慮されるべき実情である。地震動に対して極端にせい弱化した近代都市の実態と震災の怖ろしさを市民に理解させるための啓蒙活動を早急に開始する必要がある」という文章で結ばれています。

この二つの資料は、すでにかなり以前から大震災の危険性が警告されていたことを明確に証明するものです。へ市民がつくる神戸市白書委員会では、今後も震災の「人災」部分に光を当て、随時貴重な資料を発掘していく予定だそうです。

◆問い合わせ

へ市民がつくる神戸市白書委員会

〒六五七 神戸市灘区山田町三一―一

TEL 〇七八―八五二―二七六〇

FAX 〇七八―八二二―五八七八

『地震隠し検討資料シリーズ①』は定価八百円です。

購入ご希望の方は、送料三百四十円を加えて合計千四十円を郵便振替口座 〇一一〇〇―四一六七二九〇へ。

「声高」な人たち

松田 智子

(朝日新聞西埼玉支局)

最近、「声高」なボランティア、住民、市民グループが気になる。

人のため、地域のために活動しているという自負がそうさせるのか、活動していない人を見下すような態度すら感じることもある。

昨年四月、阪神大震災の取材で出会ったボランティア。留学帰りで震災直後から活動しているという彼は、別の取材で訪れた私に「そんなことよりも自分たちの活動を書いてよ」とアピールし始めた。「うちはほかの団体とは違う」「短期ボランティアは役に立たなくて困るんだよね」。

彼は仕事や生活を犠牲にし、長時間を費やしたほうが偉いと考えたようだが、「被災者のために何かをしたい」という短期ボランティアの気持ち、長期ボランティアに劣っていたとは思えない。留学でモラトリアムを楽しみ、ボランティアに専念できる彼の立場が恵まれていたに過ぎない。注目される快感と被災者を助ける優越感に浸っているだけだろう。

「短期のボランティアは実際、あまり役には立たないけれど、その気持ちを大切にしたい。震災ボランティアをきっかけに、地域に帰ってから活動してくれればいい」。震災前から地域で活動してきた別のボランティアの言葉のほうが、心に響いた。

異なる意見を受け入れない住民、市民グループも目につく。

自分の子どもには甘く、行政や教師には厳しい保護者グループ。近くにできる墓地に反対する口実に、自然保護を振りかざす住民グループ。地域づくりと称し、高価なコンサートを宣伝してくれという「町おこし」グループ。いずれも「新聞の力で何とかしてほしい。書いてくれないと、運動が広がらない」とまくし立てる。自分たちは弱者だ、被害者だと訴え、無理難題を言ってくる。「相手の言い分もわかるんですけど」と言おうものなら、「その程度の見識しかないのか」と責められ、記事の扱いが小さいと「新聞をやめる」と言いだす。住民グループには時間に余裕があり、幅広い知識を身につけた人も多い。けれども知識に経験が伴わず、ただ理屈っぽいだけの

人も少なくない。

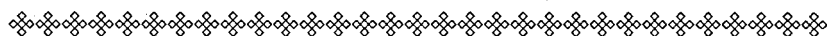
中には、自分たちの活動を宣伝して知名度を高め、金儲けや選挙などに利用しようという人やグループもある。記事を大きくするため、トリックすら使う。ある運動に何万人もの署名数が集まったというので取材したら、地域固有の問題であるにもかかわらず、署名のほとんどが地域外の人だったということもあった。

何年も活動をしている市民運動家から、「昔はもっと大きな記事にしてもらえた。記者の質が下がっているのでは」と言われたことがある。ひとつには、それだけさまざまな運動が日常化して珍しくなくなってきたことがあるだろう。同時に、不純な運動家の口車に乗せられ、利用された反省が、取材者を慎重にさせている。

逆に市民運動自身は成熟してきているのだろうか。「あの団体は行政寄りだ」など、似通った活動をする団体ほど、激しく批判しあい、足を引っ張りあうケースも目立つ。

「どうしても必要な道路なら、環境にやさしいものを作ってもらいたい」と、山間を通る林道の施工者側と協力し、虫や小動物がはい上がる側溝を作ったり、山の斜面をなるべく削らない工法を取り入れてもらうなど、より良い方向を目指しているグループもある。施工者側もその工法が全国から注目され、ますます熱心に環境を気遣うようになった。時には批判するだけでなく、協調することも大切だろう。

「話しておもしろいから」と学生から教員になった今も、自立生活をする障害者の入浴を週一回手伝う青年、「子どもたちが喜んでくれるから」と二十七年間無料公演を続けている人形劇団。日々当たり前のこととして活動しているボランティアの声は穏やかで、無理がない。日々の取材の中で、地道に活動しているボランティアやグループに出会うつれしい。そんな心ある人たちの声を逃さないよう、心がけていきたい。



から？」と寝ぼけた受け止め方しかできなかったのが初動。それが徐々に膨れ上がり、乗り換えのシンガポール空港のTVで燃えさかる長田町の映像を見たときは、完全に私のC.P.は弾け、panicに陥った。

苦勞の末、親切な人（中国マフィアのおじさんっぽく感じたのだが）に声をかけられ、コレクトコールの電話機にやっとたどり着いた。混乱の現地にかけないのは鉄則。それを忘れるほどにはうろたえていなかったらしい。自宅へかけ、子どもの声を聞き、神戸の姉がともかく無事と聞いてホッとする。

本題に戻す。上野氏の文章はこうだ：

さて、何を着るか。それが問題だ。目立たなければいけないが、目立ちすぎてもいけない。自己表現と画一性——この中に、ファッションの秘密のすべてがある。ファッションビジネスは、それが通俗性を離れて芸術になったときに、失敗する。流行現象には、着用率が三割までだと着ている人がススデル、三割を越すと着ていない人がオクレテル、カタストロフィ・ポイントがある。人々はその間でバランスを取りながら、表現すべき自己と追いかけてっをしている。

自己表現が画一性と一致する時代は、つい最近まで長く続いた。身分制度社会では、服装は明示的な社会的記号の一種だから、人々は選択の余地なくお仕着せ（ユニフォーム）をあてがわれた。メキシコで、インディオのブラウスを買った女性が、紫色を選んで着て歩いていたら、現地の人のあからさまに性的な好奇の視線を浴びたという話がある。あとで聞けば、紫色は、未亡人を表す色だった、と言う。服装は、それを見れば、その人に対するふるまい方がただちにわかるような、社会的な記号だった。未亡人は、誰かの妻でなくなったことで結婚制度の外側へはみ出した、しかも性的経験のある女性で、男性の婚外の性的欲望を、あからさまに挑発する存在だったのである。未亡人は紫色しか着なかったし、かつ紫色を着なければならなかった。そこには強制された社会的な自己表現表現があった。

ハレ・ケ・スキ——ファッション考現学と題したこの文を含め、1冊まるごと80年代に書かれた文。今読んでも全く古くない。

あこら試写室

ガマ

GAMA

——月桃の花——

こぶしプロダクション ジー・ジー・エス製作

大澤 豊監督 上映時間110分

戦後五十年目にして初めての

「沖縄県民映画」

のー」

女

「沖縄では、私たちいまだに戦争
となり合わせに暮らしている
のよ」

祖母に会うため、はるばる沖縄を
訪れたアメリカ青年・ジョージと案
内役を引受けた若い女性との会話だ。

男

「基地のこと」

戦争は人びとの暮らしも命も根こ
そぎ奪って返さない。

女

「そう」

きらめく陽光、青い海、琉球舞踊、

男

「でも、平和を守るため基地は必
要だと思います」

それが私の、遠い日の沖縄の記憶。

女

「それは違うわ、これまでにも、
米軍の起こした事故や事件のため
に何人もの子どもや大人が死
んだり、傷つけられているのよ」

映像に映し出された凄惨な光景に、
突如突き上げてくる感情は「沖縄の
みなさん、本当にごめんなさい」と
いう繰り返しの懺悔でした。

男

「そうですか、知りませんでした。
た。だけど、正義の戦争のため
の小さな犠牲でしょ、仕方のな
いことじゃないですか」

九五年九月、米兵による少女暴行
事件が起きるまで、五十年におよぶ
沖縄の人びとの苦しみを本気で知る
ことさえしなかったのです。

女

「仕方のない！なんてことを言
うのジョージ、戦争にいい戦争
と、悪い戦争があるとも言

GAMAとは沖縄で「鍾乳洞」を

意味する言葉。島のいたる所に点在
し、戦前は風葬場でもありました。

戦火が止んで、摩文仁岬のこうも

りGAMAから母娘で生還した主人公・宮里房は「青い海と太陽がまぶしかったさ」とつぶやきます。喜屋武半島のガマから這い出た八万近い人びとも、きつと房と同じ思いだったに違いない。

房はあのガマの中で目撃したいまわしい惨劇を、五十年の間胸の内にたく秘めていたのですが、こうもリガマに孫のジョージを案内し、ポツリポツリと語りはじめました。

ガマの中の悲劇はさまざまな形で耳にはいましたが、米軍保存のフィルムもまじえてその真相が初めて明確になった。場内は声ひとつなく、あちこちですすり泣く音だけがありました。

九五年六月二十三日。慰霊の日。
摩文仁の平和祈念公園に沖縄終結五十年記念事業として、大田知事が中

心となり「平和の礎^{いしじ}」は完成しました。沖縄戦で亡くなった二十三万余の人びとの名前が、国籍を問わず石版に刻まれて、訪れる人びとに無念の思いを、戦争の愚かさを伝えていきます。

春から夏にかけて咲く月桃は日本で唯一の地上戦、繰り広げられた惨劇をみんな知ってる白い花。

やさしく静かな人びとの心根うつつは月桃の姿やさしき白い花房。

(綿津靖子)

*

◆問い合わせ先 GGS東京

TEL〇四五―九二二―七三六三

東京 七月六日―十九日

新宿東映パラス2

横浜 八月三十一日―九月十三日

シネマジック

大阪 九月一日―二十二日

A C T シネマテーク

前売り券一四〇〇円 当日券一八〇〇円



あこら読書室

きらめいて生きる明治の女たち

笹本恒子写真集

笹本恒子著

清流出版

今を第一線で生きる明治の女たち十人のリレートーク「一千年のバトンタッチ」は、近頃稀れに見る名企画として人びとの胸を打った。同時に、会場と会場の階下に飾られた写真展「きらめいて生きる明治の女たち」に惹きつけられ、しばし動かずに見入った人びとも多かった。

私たちの「今」をひらいた先輩の人ひとりをお訪ねしたいと、私は長い間思い続けていたが、それを、とうに

実行していた方がいらしたのだ。笹本恒子さん。大正生まれ。

「時折、明治生まれの男性には気骨がある、という言葉に耳にします。その都度、女性の中になだって、男性に劣らぬ方が沢山いらっしゃる。その方たちの記録を、後に続く若い方々に、ぜひ残さねばならない、と思いました。戦後の日本は、到底、戦後生まれの若い方々には理解しがたい、封建制の残る、男性上位の社会でした。女は法律的には何の力もなく、一口に「女・子供」と無視され、家庭内のことすら発言権はなく、「無能力者」という烙印すら押されていたのです。(中略)生まれ時から、テレビやラジオがあり、社会に出れば『男女雇用機会均等法』で

守られ、これに反する社会に抗議することが出来る。こうした時代に生きる方々には、戦前、どれ程、女性たちが社会的に虐げられていたかを想像することさえ、難しいと思います」

その一筋の思いで写した六十人の女性たちの、なんとりりしいこと。なんと気品にあふれ、美しいこと。

「遠慮なく言わせて頂ければ、(今は)余りに写し過ぎていたのではないかな。写した写真が捨てる程溜まってしまっても、有り難みがなくなるのではないかなと思う反面、動いていくもの、変化していくもの、生きて伸びていくもの、その時、その時の姿を写して残しておくことは、なんという楽しいことか、価値あることか、とも思います(中略)。「きらめいて生きる明治の女性たち」は確かにきらめく存在であったとして、私は、歴史に語り残したい。そして、

その背後には、家のため、子供のため、老人のためと、人のために尽くし、そのけなげな貢献こそが、明治時代の女性性が、今日きらめいているという価値評価をされたのだと思います。笹本恒子さんは、このところをカメラに残して下さいました」

九十八歳の加藤シヅエさんは、みずみずしい巻頭のことばで、この写真集の意味を的確に伝えておられる。

女の問題を考える人は、ぜひ一冊、手もとに置いて頂きたい本である。

(A4判 一五八ページ 三千円) (千)

少女たちの勤労動員の記録

——女子学徒・挺身隊勤労動員の実態

戦時下勤労動員少女の会

BOC出版部

太平洋戦争の戦局が厳しくなった一

九四四年、中等学校、国民学校高等科以上に在学していた十二歳以上の少女たちは、学業を捨てさせられ、「勤労動員学徒」として兵器工場などで働かされた。すでに卒業していた者は「女子挺身隊」として動員された。

地方の学校から大都市の工場に配属され、激しい空爆の中で戦死した者、栄養失調や過労で倒れた者も少なくないが、その実態についての記録はほとんどない。全国的な動員だったにもかかわらず、該当した学年が限られていたためか、知らない人が多い。

動員は、ある日、突然当事者に知らされ、同じ学年でもクラスによってバラバラに配属されたところもあり、当時の厳しい言論統制下、少女たちは、誰が、どこで、何をしているのか、知る由もなかった。

一九九〇年、茨城県日立立高等女学

校の勤労動員の記録「十四歳の戦争」

(BOC出版部刊)の刊行を機に、その編集にかかわった人びとが、全国の勤労動員の記録集を集め、それが縁になって「戦時下勤労動員少女の会」が生まれた。実質的には旧制高等女学校と、女子師範、女子大、女子専門学校等の十代の勤労学徒が主要なメンバーだが、あえて「少女」としたのは、できるだけ、「学徒」以外の勤労動員少女も包含したいと考えたためである。当時、「女学校」に進学できたのは、女性の二割にも満たなかった。「学徒」という特権的な響きを避けたかったのだという。

略称「少女の会」は、折々に集まって歓談を続けていたが、この非常・非情な記録を世に聞きたいという思いが次第に強くなった。散逸している資料を探し、話を聞くなど、三年以上にわ

たる辛苦が東京女性財団に認められ、その助成金を得て、ようやく記録集が日の目を見ることになった。

北海道から外地まで、全国千六百校の学徒と百の挺身隊の実態、動員関係年表、百余の文集にみる勤労動員の記録などの資料のほか、五百余通のアンケートからまとめた、動員の出勤、作業内容、作業中の傷病、死亡補償、衣食・住、学業、報償金、当時の物価と生活費、動員中の愛唱歌まで、B5版三八二ページにわたる内容の豊富さには驚かされる。還暦を過ぎ、ようやく当時を思い出す心のゆとりを得た熟女たちが、手織りの糸をつむぐようにしてつむぎあげたこの本は、日本の戦史には書かれていなかった貴重な記録集である。

三年間、昼夜兼行でこの本を編み上げた編者たちは言う。「この本はもちろ

ん不完全です。ぜひこの本を読んで間違っている部分を指摘し、足りない部分を補ってほしい。あの厳しい時代を生きた遺言として、記録を残したい」と。

「挺身隊」は、朝鮮人慰安婦の募集にも使われた。日本全土から集められた膨大な「挺身隊」がなかったら、朝鮮で「挺身隊」を呼びかけるのも不可能だったかもしれない。一枚の赤紙で男たちが戦地に送られたように、学校に対する一言の指令で、少女たちは軍需産業に就かされた。「慰安婦問題」の構造的部分を考える上でも、貴重な一書と思う。

編者の一人は、あとがきで語りかける。「何故に唯々諾々と戦争に参加したのかと問う若い世代の方々に、この報告書をお読みいただきたいとねがっています。いつの世にも、いろいろな形

で、人々を不幸せに陥れるわなはたくさんあるはずです。私たちは、だまされていたという便利で安易な言葉で、自分たちのことを弁解したくはないと思っています。この報告書は実態の報告であるとともに、私たちは、こうならないためにいかにすべきかを考える資料にしてこの後を生き、次代に伝えたいと思います」

東京女性財団の助成を受けたため、市販はされていないが、先着二百名に限り、実費二七七〇円に送料四〇〇円を加えた三一七〇円で頒布される。

希望者は千一五八

東京都世田谷区深沢五―二五―一

FAX〇三―三七〇―一三八九三

中村道子さんへ。読者からの指摘を受けて稿を改め、よりよいかたちで第二集を世に問いたいと、編者たちは希望している。

(さ)

女ひとりドケチ旅 II

プラハからポーランドへ

辻 みゆき

ブダペストを早々に出て、ついに最終経由地点プラハへと向かう。

列車の中でフランス人の男の子と知り合った。学生で東欧を旅しているらしい。同じプラハへ向かうそうだ。私が具合悪そうにしていたので彼はアスピリンをくれた。イランではザヘタン以来知り合う人みんなから薬をもらい受けている。しかしなぜか熱が続いたままだ。

カフカの雰囲気が漂う町で

プラハについたのは夕方。とりあえず宿を探す。街の広場で「安い！ 一日たったの二ドル！」と宣伝していた所へ行ってみて啞然。ただの体育館のようなホールに百人近い人たちがシユラフザツクで寝ているのだ。しかも「きまり」として朝十時から夕方五時まで使用不可、と書いてある。体調が良ければそのような条件でもかまわなかっただろうが、今は一人でぐっすり寝たかった。

一緒に来たフランス人の彼も同様だったようで、私たちはあと五ドル払って、もう少しましな所に行こうということになった。

私たちがたどり着いたカレル大学寮は夏の間だけ旅行者に解放されている。とても大学の寮とは思えないほどきれいだ。シングル・ルームでも安かったたのでラッキーだった。小高い丘の上にあるのでバルコニーからはブラハの美しい町並みが見渡せる。ここまで来ればもうほとんど目的地に着いたようなものだ。

夕方、近くのレストランにフランス人の彼と食事に行く。どこにでもあるような、ごく普通のレストランだ。飢えていたのでパクパク食らいついていた私の横で、彼はサービスが悪い、愛嬌が悪い、まずい、と文句を言い続けている。そしてすべてを「旧コミュニケーション時代の影響」と結論付けた。私はフランスへ行ったことがないから知らないが、どうやらフランスのレストランはよほどサービスが良く、ウェイター、ウェイトレスも愛嬌があり、味も良いらしい。この料理も私には十分おいしかったのだが、上には上があるらしい。それにしても本当にコミュニケーションの影響で料理の味までまズくなつたのだろうか。競争がないとコックも手を抜くということなのだろうか。

私はあまり自分にはどうでもいいような文句を聞くのが好きでないが、今のうちに微熱がある体調の悪いときにそういう文句を聞かされるとますます頭痛がしてきたので、彼とは以後行動を別にすることにした。この調子ではやれ〇〇がない、××がよくない、と街を歩いていても文句ばかり聞かされそうだ。

翌日路面電車に乗ったり、地下鉄に乗ったりして街を見にいった。落ち着いた古い町並みが美しい。なんだかまだまだカフカの雰囲気漂っている。

きれいだ、きれいだ、と感動しながら歩いているうちに、頭がまた熱っぽくなっているのに気づいて寮へと向かうが、熱ではおっと浮かされているせいか、地下鉄や路面電車の方向、駅をこここ

とく間違えてしまつてとんでもない所へ行つたり来たり、三時間ほど街を徘徊してしまつた。おかげで寮にたどり着いた時には、もう本当の病人のようになってしまつていた。

すぐさまベッドにもぐりこんで眠りたかつたのだが、ここで寝るとその後しばらく起きられなくなつてしまうことが予想されたので、寮の近くのスーパーマーケットまで行つてミネラル・ウォーターと大好物のイチゴのコンポートを買いこんできた。

そしてその夕方から丸一日、苺のコンポートをミネラル・ウォーターで割つては飲み、飲んでばかり、を繰り返した。がんがん熱い額も、濡らしたハンカチで冷やす。夕方頃になつて汗が大量に出てきた。その汗が出切つてしまふとぐつと楽になつていた。バルコニーに出て夕日に照らされたプラハを眺めながら、びしょびしょになつたシャツやパンツを乾かす。明日ポーランドへ発つことにした。

ポーランドへ

プラハを発つたのは昼頃。ポーランド国境を越えたのは真夜中だつた。

ついにポーランドだ。二年間留学することになつてゐる最終地点のクラクフはあと少しだ。

三年ぶりのポーランド。久しぶりに聞くその言葉の響きも懐かしい。……気がつくとその彼は酔つ払いの声だつた。まだ若いその酔つ払いはウォッカを片手に私に「結婚してくれー」などと叫んでいる。最近失恋でもしてすっかり投げやりになつてゐるのかもしれない。一度や二度、三度や四度の失恋で人生投げてはいけない。

「おにいさん、気持ちありがとね」そう言ってもう聞いていないふりをしていると、酔っていて自分の降りる駅はすっかり覚えていたらしく、そのうち「ああ、ここか」などとつぶやきながら降りていった。国境を越えた途端に「ポーランドらしきもの」の一つに出くわしてしまったわけだ。思えばその後の一年間にどれほどの酔っ払いに出会ったことだろう。特に東洋人は珍しいのでからまれる危険性大なのだ。しかし「からまれる」といっても、いい場合と悪い場合がある。いい場合は、あるときなどバスの中で大きな花束をもらったし、あるときは「あんた、いい人だ」と言っていて「これ飲んでくれ」とまだ全く口のつけられていないウォッカの瓶を渡された。おじさん、後で絶対後悔するだろうな、と思って受けとらずにいると、おじさんは「じゃあこれでチョコレートでも買ってくれ」とチョコレート一枚分ぐらいの額の札を一枚、手に押しつけた。あまり断るのも悪い気がして、そのお金で本当にその後板チョコを買って食べたものだ。

クラクフ

クラクフに着いたのは八月二十五日早朝六時。日が明けたばかりだ。さすがポーランド、まだ八月なのにすっかり冷え込んでいる。もう秋だ。Tシャツと綿の長袖シャツしか持っていなかったのが寒くて寒くてしょうがない。よほどチャドルを被ろうかと思った。

まず一年前から留学している友人の所に厄介になることになっていたのだが、こんなに早く行つてたとき起こすのもかわいそうだと思つて、そこでコーヒーでも飲もうと思つたのだが、ポーランド通貨を持っていないことにふと気がついた。うちから持つて出た五ズウォティや十ズウォティ

の小銭も鑑真号に置いて来ていた。

「うーん、やっぱりあれを持ってくれば良かったなあ……」と思ったのも束の間、店の値段表に「コーヒー・八千ズウォティなり」と書いてあった。やはりものすごいインフレだ。仕方なしに寒さと空腹を抱えたまま、友達の住まいに向かい出した。

中心街を取り巻く緑の並木道や石畳、すべてが三年前と変わらない。この三年間にびっくりするような変動があつたなんてなんだかぴんとこない。じわあつと胸の底から懷かしさが染み出してきた。友人は家にいなかった。そういえば旅行に行っているかもしれないと手紙に書いてあつたわけ。彼女の家の大家さんの住所をもらっていたので、タクシーを拾い、一ドル渡してそこまで行つてもらった。

大家のおじさんに聞くと、彼女はやはり旅に出ているらしい。おじさんは鍵を持って住まいまで来てくれ、鍵の掛け方、開け方、ガスのつけ方、植物の水のやり方などをこまごまと説明したあと、今日は日曜日で店が開いてないからと、パン、チーズ、ハムなど一日分の食料を置いていつてくれた。さあこれで一安心。神戸からここまでの駆け足貧乏旅行も終わった。これからはここラクフでゆつくり勉強するのだ。もう当分は動かなくていい。

まずシャワーを浴びて一休み。その前に体重計に乗ってみた。

なんと日本を出る前と比べて五キロも減っている！……私は狂喜してしまった。乾燥氣候を通じてきたせいで体中の水分が出てしまったのだろうか。そういえば旅の後半はなんだか体がふらふらすると思っていた。「やせたのだ」……そう思つて鏡を見ると心なしか顔がしまつてきたように見える。

「留学するとなぜか皆太る」と警告されてきたが、すこぶる快調な出だしだった。

三週間以上続いていた熱も、気がつくとうソのようにすっかり下がっていて、体は信じられないほど絶好調、ゆっくり寝ていられるという時に限ってピンピンしている。

「九月上旬までにポーランドに到着願いたし」との連絡を受けていたので、私はすぐに入学手続きを済ませるべく大学に行った。

あなたの籍はありません

外国人のためのポーランド語・文化教育機関というその大学の分科は、街の中心から数キロ離れた小高い山の上にあるらしかった。バスから下りて見上げると城らしきものが見える。

登ってみるとその城が大学だった。城を囲む木々にはカッコウが巣を造っている様子。何と情緒のあるところなのでしょう……と感心している場合ではなかった。

事務所に「ここで勉強する旨、大使館を通して申し込んだんですけど……」と拙いポーランド語でなんとか作文して言うと、係のおばさんは入学者名簿をばらばらとめくって見て一言、「ありません」と言ったのだ。

「でも、確かに申し込んで返事もいただいたんですよ」と鞆の中から旅の間もしつかりと身から離さなかった大使館からの通知の手紙をおもむろに取り出した。

しかしおばさんはそれをちらと一瞥しただけで、

「そんなこと言っても無いものは無いんだから」と言った。

大学に入れないのなら何のためにこうやって苦勞してポーランドに來たのだろう。今回は戻ってまた來年なんて考えられない。そんなことだったら往復の飛行機を使ったほうが安上がりだったのだ。

そんなことが頭の中を駆け巡っていると、おばさんは「あつ」と叫んだ。

「やっぱりあったんでしょ」と喜んだのも束の間、おばさんは、

「ここで勉強することになってはいたけど、もう終わっているわよ」と言った。

「終わっている?！」

「そうよ、あなた八月に一月間ここで勉強することになっていたみたいだけど、その後は他のところに籍を置くことになっているわよ」

こういうことはポーランドで起こりがちだとは聞いていたが、まさか自分の身にふりかかるとは思っていなかった。すべて聞くことが初耳のことばかりだ。

八月のことは、とろい旅行をしていたせいで逃してしまったらしいが、ここでも他のところでもともかく籍があるのならそれでよろしい。滞在ビザがとれるし、なんとか勉強することができる。

思わず心いらだって

「文学部」だということで早速そこへ行ってみた。そこでは「わからないから中央で聞いてくれ」と言われた。大学の総務のような所で留学生関係のことすべて扱っているらしい。

総務でも係のおばさんが閻魔帳のようなものを取り出して文学部のところをべらべらめくって調べてくれた。しかし私の名は無いらしかった。まあ、当然といえば当然だ。私自身申し込んだ覚え

がないのだから。それにしてもどこかで間違えられたのなら、せめてその間違った処置だけでもしつかりしておいてほしいものだ。今のような場合、本当に申し込んだところには籍がないと言われるし、かといって「ここでなくあっちだ」と言われたところにも籍がないし、どうしようもない。

もう一度初めのおばさんのところに話しに行ったところ、「ちょっと待て」と言われた。「待てば海路の日和あり」ということらしい。入学を申し込んでいても実際には来ない人がいるかもしれないからそれを期待しなさい、ということだった。まるで飛行機の空席情報だ。学校の始まる十月まで待つだけだったのなら、何のためにあんなに駆け足でここまできたんだろう。こんなことだったらトルコでもっとゆっくりしておけばよかった……。なにもあのくそ暑い中、テヘランからイスタンブールまで直行することなんかなかったのだ。私はなんだか悔しくなった。

「そんなに待てません」私はすっかりせっかちになって詰め寄った。

「私のせいじゃなくてあなたたちのせいでしょ」と、直接おばさんに責任があるわけではないのはわかっていたが、つつい鼻息が荒くなった。席が空くかどうか少しぐらい早くわかったところで当分特にすることもないようなので、大した問題ではなかったのだが、その頃の私は妙にせっかちだった。

「ともかく早く、どうなるのかはつきりしてほしいんです」

ウツジ行きをすすめられる

するとおばさんはここでなくウツジというところに行けば、その同じような学校に入れる、あ

そこはいつもここほど人気がないから大丈夫だろう、と言った。

ウッジ……音に聞く最悪な工業都市。見るべきものが何もない所……。『地球の歩き方・ポーランド編』にも載っていない所だ。なんだか名前を聞いただけで憂鬱な気分になった。

ポーランドを全然知らない人、首都のワルシャワぐらいしか知らない人にとつては「クラクフとかいう所でも、ウ、ウッジ?とかいう所でも、同じポーランドなんだからどうってことないんじゃないの?」と思われるかもしれないが、その場合は日本に置き換えて、京都と四日市市と考えてもらえばよい。

私は首都ワルシャワもあまり好きでない。最初の旅行の時もワルシャワしか見ていなかったら、その後これほどポーランド、ポーランド、と執着していなかったことだろう。私がポーランドをこれほど好きになったのは、ひとえにこのクラクフという所へ来たからだった。

だからクラクフにいられないということは何よりも悲しかったのだが、ウッジにいると日本人がいなくて日本語をしゃべる機会がなく、ポーランド語の上達に良いという話も聞いたし、学校にはアラブ人が多いと聞いたので、イラク、ヨルダンへ行つて以来アラブ人に親しみを感じていた私はウッジもいいかもしれないと思い始めた。

なにはともあれ一日中迷っているわけにもいかないので、ポーランド人の友人たちを訪ねることにした。彼ら、何も連絡してなかったのでびっくりすることだろう。

〔新入会〕

現在私は、大学院にて女性の自立について研究しております。今回へあごらに参加を希望しましたのも、女性のネットワーク活動に実際に参加することで自己の研究を深め、さらには女性の自立の展望を築いてまいりたいと思ったからです。直接的な参加によって、これまで自分が見えなかったところ、知りたいと思っても知り得なかったことを、勉強させていただきたいと思っています。メンバーとして参加することは、研究を実践に生かす貴重な体験となることでしょう。

へあごらの結成から現在に至るまでの軌跡とより具体的な活動内容について知りたいと思っています。

女性の自立には女性のネットワークが非常に重要な役割を果たしているのではないのでしょうか。このネットワークの社会的意味について考察するための重要な

一段階として、ぜひ参考にさせていただけたらと考えております。

（調布市 築山裕子）

＊

あごら二一七号『沖縄の女 ヤマトを動かす』を読みまして、次は沖縄の女性たちに、ぜひ境界へ挑戦していつて欲しいと思います。これほどの運動をして、まだまだ思いがかなわないわけです。政策決定の場へ出ないことには、私どものおもう社会、世の中にすることはできないのではと思っています。

斉藤さんも、ますますお励み下さいまして、大変ではありますうが、私共を導いていつて下さいますよう。

（山口 勝又みずえ）

（二一八号訂正とお詫び）

◆七四ページ「キャロリン・フランシスさんは日本の本土で三十年ほどHELPEに關わつて……」という箇所、三

十年という年数はフランシスさんが日本で宣教師として活動されている年月で、HELPEには約十年關わられているとのこと指摘がありました。お詫びの上、訂正させていただきます。

〔編集後期〕

◆懸案の「北京会議」特集ですが、現在雑誌ではなく単行本としてまとめる方向になりつつあります。編集委員になつて下さる方、情報を提供して下さる方を募集しております。お待たせして申し訳ございません。

それから、「あごら」の發送作業やワープロなどを手伝つて下さるボランティアも募集中！ ぜひともご連絡を。（礼）

◆言つてもムダ：言えない：あきらめてしまつてゐる。それが諸悪の根元では？「自立の心理学」に参加するたびに、怠惰な己れに気づき、行動の勇氣をもらいます。どうぞご参加を！（干）

—— 沖縄とヤマトを結ぶ『あごら』シリーズ ——

沖縄を犠牲にした

安保の上に眠れますか

¥ 680

響け！女たちの憤り

沖縄からの告発

¥ 1,250

沖縄の女

ヤマトを動かす

¥ 1,250

沖縄からの発信

沖縄の山・海はいま……

¥ 680

◆ご注文はハガキまたは電話・FAXで

〒160 東京都新宿区新宿1-9-4
03-3354-3941 FAX 3354-9014

あごら編集部

あごら 219号 ●発行 1996年6月10日

●編集 あごら自立の心理学

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-4-303

●TEL 03-3354-3941 ●FAX 03-3354-9014 ●振替00100-0-5264

●発行人 あごら企画会議 ●定価 810円(786円+税24円)

この ひろい宇宙に
たった一つの地球

その 大きな地球に
たった一人のわたし
そして あなた

かけがえのない地球
かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから
たいせつに たいせつに しよう

あなたも
わたしも

地球も

たった一度きりの人生だから

思いきり

のびやかに生きよう

だれもが だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ 生きててよかったねと

ほほえみあえる地球にしよう

へあごら

人と人の出会うひろば

へあごら

人と人の共に生きるひろば